

# 当郷遺跡

—市道3363号線(東部環状線)道路改良工事に伴う発掘調査—

2014

館林市  
館林市教育委員会



文化財愛護シンボルマーク

<http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/>

# 当郷遺跡

—市道3363号線(東部環状線)道路改良工事に伴う発掘調査—

2014

館林市  
館林市教育委員会



## 序

今回調査が行われた当郷遺跡は、館林市街地から北東方向、城沼北岸の台地上にあります。

現在、本市には145ヶ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）があり、開発が行われる際には関係者の方々のご協力のもと、発掘調査が行われています。当郷遺跡ではこれまで、平成7年度に範囲内の別地点で発掘調査が実施されています。その際には、中世の遺構・遺物が確認されています。

今回の調査は館林市（都市建設部都市計画課）を事業者とする「市道3363号線（東部環状線）道路改良工事」を契機として行われました。この道路は市内当郷町地内を起点とし、同楠町地内を終点とする新設環状道路として計画されたものです。完成によって市街地の渋滞緩和はもとより、東北自動車道館林インターチェンジと近隣の工業・産業団地等とのアクセス機能が強化されることで、地域産業のさらなる振興に大きく寄与することが期待される、重要な路線です。

こうした背景のもと、事業者のご協力により、工事に先立って道路予定地における今回の埋蔵文化財発掘調査は行われました。その結果、古墳時代（5世紀末頃）から平安時代（9世紀頃）にかけての集落跡が発見されました。その規模は、これまでに市内で確認された同時代の遺跡の中でも特筆すべきものでした。長期間にわたってこの場所を拠点に生活を営んでいた先人たちの様子を知ることが出来たのは、今回の調査の大きな成果と思われます。

群馬県には東日本一の数と規模を誇る古墳や、日本三古碑の1つ「多胡碑」を含む貴重な「上野三碑」などがあり、古代東国文化の中心地として繁栄していたことが知られています。今回の調査ではそれらと同時代の住居跡や遺物を多数確認でき、当時の館林の様子を知る手掛かりを得ることができました。また、本調査地点の西方には市指定史跡「山王山古墳」（6世紀後半）があります。時期的・地理的に接する今回の集落跡と山王山古墳にどの様な関係があったのか、それを解き明かすヒントとしても、今回の調査は大きな意味をもっています。今後も古代館林への興味は尽きません。

こうして目の前に現れた先人たちの足跡の一端は、館林がこれまで歩んできた歴史の深さを私たちに改めて教えてくれました。そして今回、調査の成果を歴史の1頁として新たに記録し、本報告書を発刊する運びとなりました。この報告書が現代の私たち、そして後世の人びとが館林の歴史を知るための資料として、また、郷土の歴史・文化を再発見する手掛かりとして活用されれば幸いです。

最後となりましたが、今回の発掘調査および報告書の作成にあたり多大なるご指導、ご協力をいただいた事業者をはじめとする各方面の方々がたに厚く感謝を申しあげます。

平成27年1月31日

館林市教育委員会

教育長 橋 本 文 夫

## 例　　言

- 1 本書は、館林市（都市建設部都市計画課）が実施する「市道3363号線（東部環状線）道路改良工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成25年度に実施された「当郷遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業、報告書刊行は事業者である館林市（都市建設部都市計画課）から依頼を受け、館林市教育委員会が実施した。
- 3 当地点の所在地は群馬県館林市楠町（字陣谷3719番4及び5）、調査面積は約450m<sup>2</sup>である。
- 4 調査・整理・報告書作成の期間は次のとおりである。
- ① 試掘・確認調査 平成25年9月17日～平成25年10月3日（館林市教育委員会実施）  
② 記録保存調査 平成25年11月6日～平成26年1月31日（館林市教育委員会実施）  
③ 整理・報告書作成 平成26年6月26日～平成27年1月31日（館林市教育委員会実施）
- 5 本書において報告する遺跡名は「館林市遺跡台帳」に基づくものである。地点名は平成25年度の調査であることから、「平25地点」とする。
- 6 調査組織は次のとおりである。
- |           |          |       |        |
|-----------|----------|-------|--------|
| 調査主体      | 館林市教育委員会 | 教育長   | 橋本 文夫  |
| 担当課       | 文化振興課    | 教育次長  | 坂本 敏広  |
| 調査組織      | 館林市教育委員会 | 課長    | 岡屋 英治  |
| 文化振興課     | 文化財係     | 係長代理  | 石崎 治   |
| 文化財係      | タ        | 主任    | 阿部 弥生  |
| 文化振興課     | タ        | 主任    | 田沼 あゆみ |
| 文化振興課     | タ        | 主任    | 田沼 美樹  |
| 文化振興課     | タ        | 主事    | 奈良 純一  |
| 文化振興課     | タ        | 主事補   | 金子 陽祐  |
| 市史編さんセンター | タ        | 主幹兼所長 | 岡屋 紀子  |
| 市史編さんセンター | タ        | 主事    | 宮田 圭祐  |

- 7 調査作業員・整理作業員  
飯塚 賢治 池下 寛人 久保田憲司 小島 鉄男 阪口 丈夫 杉田 和実 高野 愛  
館野 駒三 寺鶴 美雪 根岸 良子 橋本二三夫 原田 和沙 久田 進 前田 清美  
三橋 瑞江（50音順敬称略）

- 8 出土遺物、調査記録及び資料は館林市教育委員会で保管し、公開に資する。  
9 本書の編集・執筆は、奈良・宮田が中心となり行った。第1章～第3章は奈良、第4章は宮田が執筆した。  
10 遺物の実測・観察表及びその他の図版の作成は、奈良、宮田、金子、池下、高野、根岸、原田、前田、三橋で行った。一部作業は（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団と（有）毛野考古学研究所に委託した。  
11 調査の実施及び本書刊行にあたり、下記の諸氏諸機関のご協力を頂きました。ここに記して厚く感謝を申しあげます。（順不同、敬称略）

群馬県教育委員会事務局文化財保護課	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
板倉町教育委員会文化財資料館	館林市史編さん委員会原始古代部会
館林市都市建設部都市計画課・道路河川課	館林市環境水道部水道課・下水道課
館林市農業委員会	(有)毛野考古学研究所
閔 邦一 ((公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)	宮田 翼 宮田裕紀枝

## 凡　　例

- 1 遺跡周辺図は、館林市都市計画図（S=1/2500）を用いた。なお遺跡位置図中のスクリーントーン  
■■■■■は遺跡地、■■■■■は調査地を示している。
- 2 遺構図内の焼土の範囲は■■■■■で示した。
- 3 土層断面及び出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修「新版土色帖」に従った。一部、調査担当者の目視による判断も含まれる。
- 4 揭載遺物は基本的に縮尺1/4で掲載した。また、赤彩■■■■■、黒色土器■■■■■、釉薬■■■■■、スヌ  
■■■■■、須恵器断面■■■■■を示した。
- 5 精査の結果欠番となった住居No.もあるが、資料整理の都合上そのまま使用し、( )付けて表記した箇所もある。

# 目

例言・凡例・目次・挿図目次・写真図版目次

第1章 館林市の環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第2章 当郷遺跡の立地と概要	2~3
1. 発掘調査に至る経緯	2
2. 当郷遺跡の概要	2
3. 周辺遺跡の概要	2~3
第3章 調査内容と成果	4~32
1号住居・2号住居	4
3号住居・5号住居	5
6号住居	6
24号住居・26号住居・8号住居・9号住居	7
10号住居A・B	9

# 次

11号・12号住居	10~11
14号住居A・B	11
15号住居・27号住居・16号住居A・B	13~14
17号住居群A・B・C・E・F・I	14
18号住居	15
22号住居・19号住居	16
20号住居	17
21号住居・23号住居・29号住居・30号住居	
31号住居・32号住居	18
第4章まとめ	33~39
1. 土器編年について	33~34、39
2. 当郷遺跡と周辺遺跡	33~39
遺物観察表	40~43

写真図版・報告書抄録

## 挿図目次

第1図 館林市の位置	1
第2図 館林市の地形概念図	1
第3図 当郷遺跡周辺図	2
第4図 当郷遺跡調査区	2
第5図 当郷遺跡調査区掘削遺構状況	3
第6図 1号住居	4
第7図 2号・3号住居	4
第8図 5号住居	5
第9図 6号・24号・26号住居	6
第10図 8号・9号住居	8
第11図 10号住居	9
第12図 11号・12号住居	10
第13図 14号住居A	11
第14図 14号B・15号・27号・28号住居	12
第15図 16号住居	13
第16図 17号・18号・22号住居	15
第17図 19号・20号住居	16
第18図 21号住居	17
第19図 23号・29号・30号・31号・32号住居	19
第20図 1号・2号・5号・6号・24号住居出土遺物	20

第21図 8号住居カマド出土遺物	21
第22図 8号住居カマド・8号・11号~13号住居出土遺物	22
第23図 14号住居出土遺物	23
第24図 15号住居出土遺物①	24
第25図 15号住居出土遺物②	25
第26図 16号・27号住居出土遺物	26
第27図 17号住居群出土遺物	27
第28図 17号・18号・22号住居出土遺物	28
第29図 20号住居出土遺物	29
第30図 21号住居出土遺物	30
第31図 21号・30号住居出土遺物	31
第32図 29号・31号・32号住居・調査区内表探査物	32
第33図 迅速測図にみる周辺の湿地帯	34
第34図 昭和31年館林市内地形図	34
第1表 当郷遺跡出土遺物編年表(环)①	35~36
第2表 当郷遺跡出土遺物編年表②	37~38
遺物観察表①	40
遺物観察表②	41
遺物観察表③	42
遺物観察表④	43

## 写真図版

写真図版 1~1	重機による掘削
写真図版 1~2	調査区全景
写真図版 1~3	調査区全貌
写真図版 1~4・5	1号住居
写真図版 2~1・2	2号住居
写真図版 2~3	3号住居
写真図版 2~4	5号住居
写真図版 2~5~3~3	6・24・26号住居
写真図版 3~4~4~1	8号住居
写真図版 4~2~4~5	9号住居
写真図版 4~6~5~2	10号住居A・B
写真図版 5~3~5~5	11・12号住居
写真図版 5~6~5~8	14号住居A
写真図版 6~1~6~5	14号住居B
写真図版 6~6~7~5~7	15・27・28号住居
写真図版 7~6~8~1	16号住居A
写真図版 8~2~8~8	17号住居群

写真図版 9~1	18号住居
写真図版 9~2・3	22号住居
写真図版 9~4~9~8	20号住居
写真図版 10~1	19・20号住居
写真図版 10~2~10~7	21号住居
写真図版 10~8~11~7	29・30・32号住居
写真図版 11~8	31号住居
写真図版 12~1~2~5~6~24~11~12号出土遺物	
写真図版 13~8号住居カマド・8号住居出土遺物	
写真図版 14~13~14~27号住居出土遺物	
写真図版 15~	15号住居出土遺物
写真図版 16~	15・16号住居出土遺物
写真図版 17~	17号住居群出土遺物
写真図版 18~	20・18・22号住居出土遺物
写真図版 19~	21号住居出土遺物
写真図版 20~29~30~31~32号住居出土遺物・調査区内表探査物	

# 第1章 館林市の環境

## 1. 地理的環境



第1図 館林市の位置

館林市は群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km<sup>2</sup>である。北は栃木県足利市・佐野市、東は邑楽郡板倉町、南は同明和町に接する。

明和町の南には利根川が東流し、群馬県・埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50km、東京（台東区浅草）へは約65kmの距離にあり、首都圏との結びつきも強い。

群馬県東南部は「邑楽・館林」地域と呼ばれ、県内では低地に位置している。館林市の標高は、15m（大島町東部）から33m（高根町）である。地形を概観すると、市域中央部には低台地が東西に延び、その周辺に低地が広がっている。

この低台地は「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地で、太田市高林から市域中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根町に至る台地の北側に沿って、日本最古の砂丘の一つである

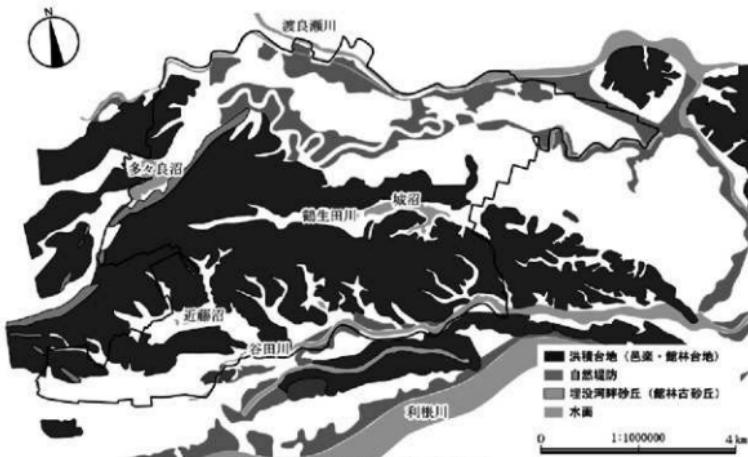
埋没河畔砂丘が走っており、本市の最高標高点はこの上にある。

低地帯はおもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地で、台地北側の低地帯には旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、台地南側の低地帯では茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」は沖積低地から延びる多くの谷地により樹枝状に開析されており、そのなかで最大のものは中央部を東流する鶴生田川及び城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市の景観的な特徴の一つとなっている。

## 2. 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は145ヶ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別すると、旧石器時代の遺跡3、縄文時代の遺跡13（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡0（弥生時代の遺物を採取できた遺跡2）、古墳時代～平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96（このうち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23）、古墳は17（古墳総数25基）、中世生産址1、中世城館址12、近世城館址2である。ただしこの数は、複合した時代の遺物が見られる散布地を、それぞれの中心になると考えられる時代でまとめたものである。



第2図 館林市の地形概念図

## 第2章 当郷遺跡の立地と概要



第3図 当郷遺跡周辺図 (1:5000)

### 1. 発掘調査に至る経緯

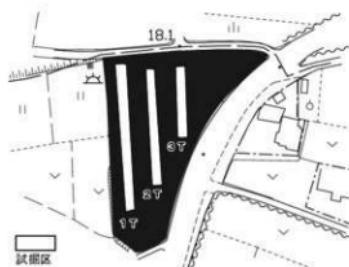
当郷遺跡（平25地点）は、館林市（都市建設部都市計画課）が実施する「市道3363号線（東部環状線）道路改良工事」に伴って発掘調査が実施された。平25地点は当郷遺跡の範囲の北東部、台地の端部分に位置する。市道3363号線（東部環状線）道路改良工事は、館林市当郷町地内を起点とし、同桶町地内を終点とする新設環状道路の整備を目的とした事業であり、平25地点はこの東端に位置する。事業の進捗に伴って事業者である館林市より試掘確認調査の依頼が提出され、これに基づいて平成25年9月17日から同年10月3日に掛けて試掘確認調査を実施した。

試掘確認調査では、地区内に3本のトレンチを設置した（第4図）。調査の結果、多数の土器等の遺物の出土と竪穴式住居の存在が確認されたため、本教委は事業者である館林市に対して工事施工前に発掘調査が必要である旨を通知した。試掘確認調査の成果を基に、事業者と保存方法に関する協議を行った結果、記録による保存を行うことで合意に至り、発掘調査が実施された。

### 2. 当郷遺跡の概要

当郷遺跡は館林市街地の北東、東武伊勢崎線館林駅から約4kmの場所に在る。地形上では邑楽・館林台地の東部に当り、城沼北岸の舌状台地上に位置する。遺跡の範囲は、館林市当郷町および桶町地内に当る。周囲は農地と宅地が混在する地域で、遺跡の北部は渡良瀬川に連なる低地地帯となっている。遺跡の北部は農地、南部は宅地を主とする利用がなされているが、どちらも平坦化が進み、舌状台地の形状・景観は失われつつある。

本遺跡では、平成7年度に個人住宅建設に伴う発掘調査が行なわれた。その際には調査区域内に南北3本のトレンチを設定し、溝1条、井戸1基が確認された。溝からは完形のカワラケや内耳土器の一部、馬と思われる歯の骨が出土した。遺構・遺物ともに中世のものであった。



第4図 当郷遺跡調査区

### 3. 周辺遺跡の概要

周辺の埋蔵文化財包蔵地としては、当郷遺跡（平25地点）の南東部に「陣屋遺跡・羽附陣屋跡」がある。館林市街地の東方、城沼北岸の洪積台地上の高台をその範囲とし、縄文時代から平安時代にかけての集落跡で

ある陣屋遺跡と、中世の城館跡と推定される羽附陣屋跡が重複して一体となっている。

同遺跡ではこれまでに2度の試掘確認調査が行われている。遺跡範囲北東部で行われた平成3年度の調査では、中世のものと思われる掘立柱建物跡や竪穴式住居跡などの遺構が確認された。また、平成15年度に行われた遺跡範囲南西部での調査では、古墳時代（中期）から平安時代と推定される竪穴式住居跡21軒が確認され、多数の遺物も出土している。

#### 基本層序

本調査区の基本層序は、第Ⅰ層から第Ⅳ層に分けられる。第Ⅰ層は耕作土層で、厚さ約15cmである。第Ⅱ層は耕作に伴う耕盤層で、厚さ約2~3cmと薄いが、非常に固く締まっており灰色を呈する。第Ⅲ層は暗褐色土層で、縮まり・粘性は弱い。第Ⅰ層～第Ⅲ層までは調査区全面で確認される。第Ⅳ層はいわゆるローム層であり、調査区南では地表下40cmで確認できるが、北西部では深度120cmでも明確なローム層は確認できない。第Ⅰ層・第Ⅱ層は人為的堆積層。第Ⅲ層は、河川の氾濫などによる水性堆積層、第Ⅳ層は風成堆積層であると考えられる。

ローム層の落ち込みからも当遺跡の立地が舌状台地上であることがわかり、調査区南西から北西にかけて第Ⅲ層が厚く堆積している。



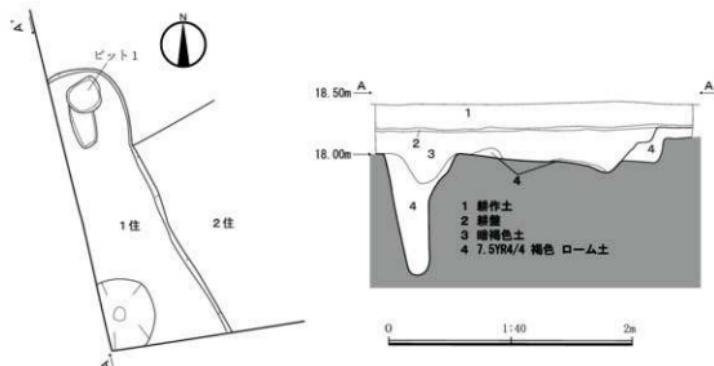
### 第3章 調査内容と成果

#### 1号住居（第6図）

**概要** 調査区南西端で確認された。範囲は東西約1m・南北約2mである。調査区外南西方向にさらに広がるため、全容は不明である。床面の一部には貼り床が見られた。

**遺構** 住居跡南西端でピットが確認された。遺物は伴っておらず、詳細・年代は不明である。

**遺物** 土器片と須恵器の壺の一部、各1点が床面上でまとめて確認された（第20図）。



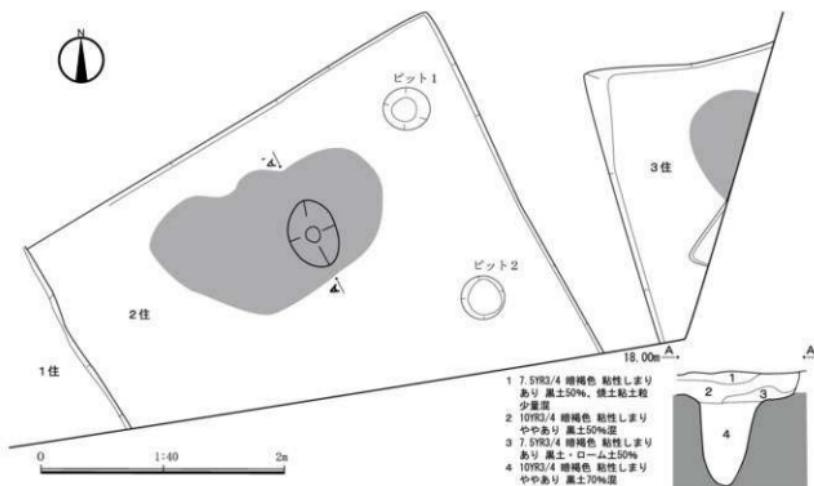
第6図 1号住居 (1:40)

#### 2号住居（第7図）

**概要** 調査区南端中央部で確認された。範囲は東西約3.7m・南北約3mである。調査区外南側にさらに広がるため、全容は不明である。床面の一部は貼り床である。南西端で1号住居と重複している。

**遺構** 住居範囲中央部に焼土の広がりが見られた。焼土は床面下まで続く。焼土内には土器片が含まれていた。

**遺物** 焼土範囲内より、土器片の口縁部分と見られる土器片が出土した。底部が欠損しているが、口径に比して胴部の幅が広く、底部にかけて窄まることから5世紀末から6世紀頃のものと推定される（第20図）。



第7図 2号・3号住居 (1:40)

### 3号住居（第7図）

**概要** 調査区南東端で確認された。範囲は東西約0.8m・南北約2mである。確認できたのは住居北西角部分と思われ、調査区外にさらに広がっており、全容は不明である。北側で6号住居と重複している。

**遺構** 南東部に焼土が見られたが、範囲は狭く厚みも薄く遺物は見られない。  
**遺物** 確認されていない。

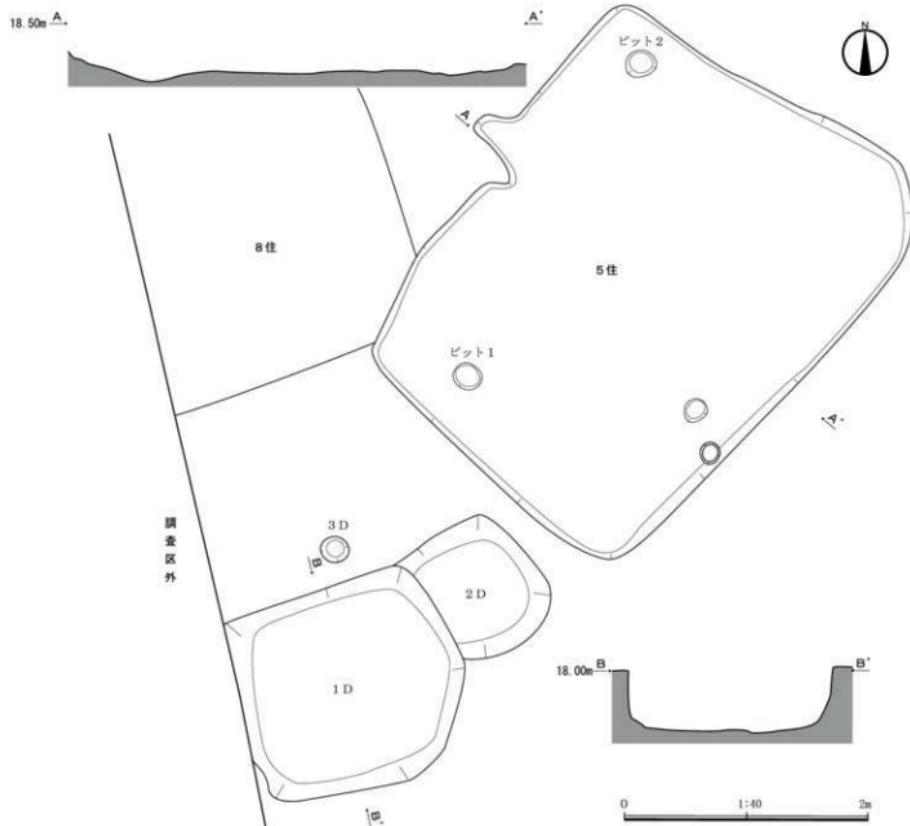
\* 4号住居 調査当初は住居跡として調査されたが、精査の結果、土坑であると判断された。そのため、4号住居は欠番とする。

### 5号住居（第8図）

**概要** 調査区中央南で確認された。東西約2.8m・南北約3.5mの長方形である。北西側で8号住居と重複しており、その状況から8号住居よりも新しいと判断される。

**遺構** 北及び、北西側のピット2基以外に柱穴と見られるものは見つからなかった。また、住居から突出した遺構はカマド煙道部と見られるが、これに連なるほかの遺構や遺物はない。

**遺物** 棒状研磨を施された土師器皿の一部が出土した（第20図）。



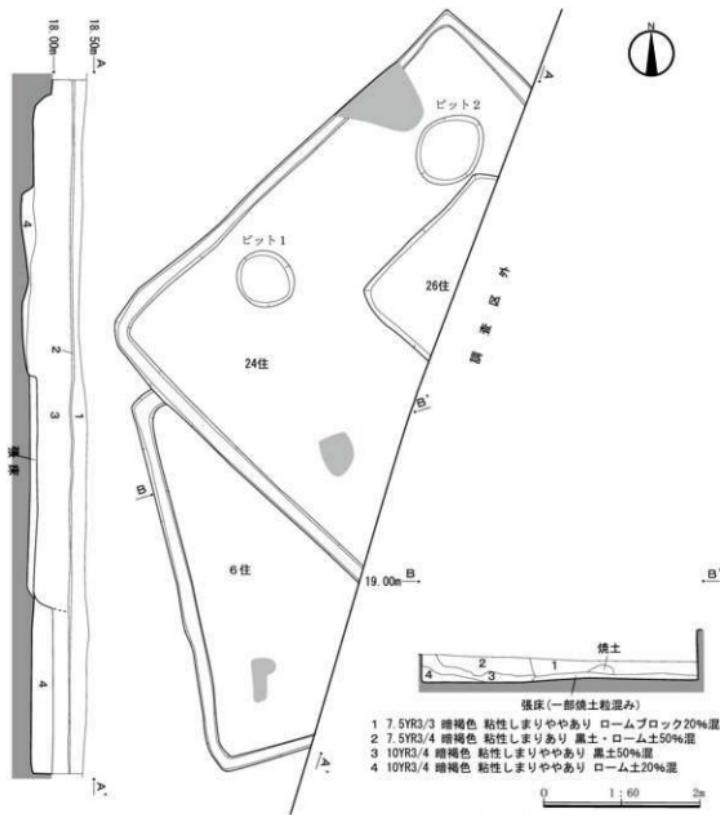
第8図 5号住居 (1:40)

## 6号住居（第9図）

**概要** 調査区南東端で確認された。24号住居と重複し、確認できたのは西側部分のみである。重複の状況から24号住居より古いものと判断される。確認出来た範囲は南北4.5m・東西約18mであるが、調査区外東に広がっており、全容の解明には至らなかった。

**遺構** 壁面下部に周溝をもち、床面は貼り床となっている。床面の南西付近に焼土が見られた。焼土は塊状になっており、約10cmの厚さを持つ。焼土およびその周辺には貼り床が見られないため、直接本住居に関係しない可能性もある。

**遺物** 土師器高杯のほか、小型甕の一部などが確認された。その破片の一部は24号住居の範囲からも見つかっており、埋没過度で両住居に混雜した可能性がある（第20図）。



## 24号住居（第9図）

**概要** 調査区南方東側で確認された。範囲は調査区外東側に広がっており、全容は不明である。南側で6号住居と重複し、範囲内にはさらに26号住居がある。これらの重複の状況から、本住居は6号住居より新しく、26号住居より古いと判断される。北東から南西方向の一辺約5.7mが確認され、全体の形状は方形と推定される。

**遺構** 範囲内には2基のピットと2箇所の焼土集中箇所が見られる。北東付近で見られた焼土は壁に接するようあり、カマドの可能性があるが、住居外に統く煙道部は確認できない。一部では貼り床が見られた。

**遺物** 確認できた遺物は、土玉以外は全て土師器であった。第20図-9と10はいずれも甕又は壺の口縁部の一部である。10は口縁の外反が直線的であるのに対して9はやや「コ」の字状を呈している。7は壊で、明確な稜を持ち、口縁は内傾する。8は塙と見られ、平底と直線的な胴部を持ち、胴部表面にはタタキによる調整が見られる。

## 26号住居（第9図）

**概要** 調査区南方東側端で確認された。範囲は調査区外東に広がっているが、方形と推定される。一辺は約2mで小規模である。24号住居の床面を掘り込んで作られている。

**遺構** 住居範囲内で柱穴などは確認されていない。

**遺物** 遺物は確認されていない。

## 8号住居（第10図）

**概要** 調査区中央やや南西付近で確認された。範囲は東西約2.2m・南北約7.4mであったが、さらに調査区西側に広がっているため、全容は明らかでない。

東側壁中央付近にカマド一基があり、そのほかにも多数の土坑が見られる。全容は明らかでないが、本調査区では比較的大形の住居といえる。外周の一部では周溝も確認されている。一部で9号住居と重複しており、その状態から9号住居よりも新しいと見られる。床面には広範囲に貼り床が見られ、確認できた土師器・須恵器の量も多く、多くの器種が完形で出土した。

**遺構** 住居範囲内では、土坑が数基確認されている。カマド左の土坑からは土師器等が出土しており、貯蔵穴と考えられる。カマド右の土坑は、1m四方の正方形に床を掘り込み、さらに中央部を楕円形に掘り込んでいる。いわゆる鬼高窓の住居跡であり、その位置と形態から貯蔵穴と考えられる。

南側壁と東側隅で周溝が確認できた。西側についてはさらに調査区外に統いている。カマドは東側壁中央付近で確認された。

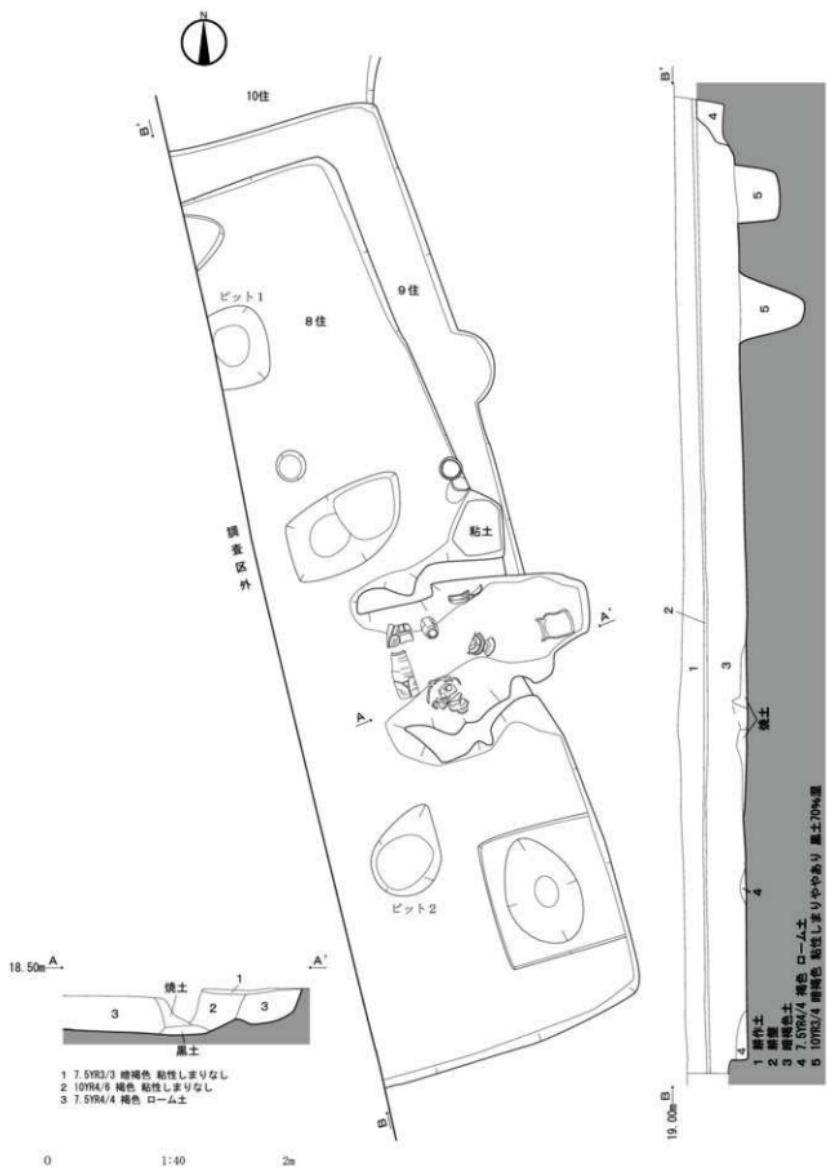
**遺物** 7世紀後葉以降と見られる土師器もあるが、カマド出土資料を中心とした全体的に6世紀前葉から7世紀中葉頃と見られるものが多い。第21図-2・4はカマドの支脚に転用され、2は4の坏部に覆い被さって出土した。1・3・5・6・7はカマドの袖部、9と第22図-1・2は天井部の構築材として使用されたと考えられる。第21図-6・7は焚口付近で口縁部下にして対になる形で出土し、8は煙道部に内面を上にした状態で出土した。長胴甕の多くは寸胴な長胴で、7以外は底部に移行するにつれ窄まるものが多い。第21図-1の須恵器や5の小形甕などは古手と考えられるが、欠損品であることからカマド補強材への転用と考えられる。

## 9号住居（第10図）

**概要** 調査区中央西端で住居東側と推定される部分が確認された。8号住居により広範囲が破壊されたと見られる。重複の状況から8号住居より古いものと判断される。なお、調査区西側にも広がると見られるが、本調査においては全容を確認することはできなかった。

**遺構** 東中央部では粘土塊と焼土が見られた。住居範囲の端にあたる場所であり、円形で一部が住居外に出ているため、煙道部の可能性がある。カマドとも考えられるが、関連する可能性のある遺物や設備は見られなかった。

**遺物** 遺物は確認されていない。



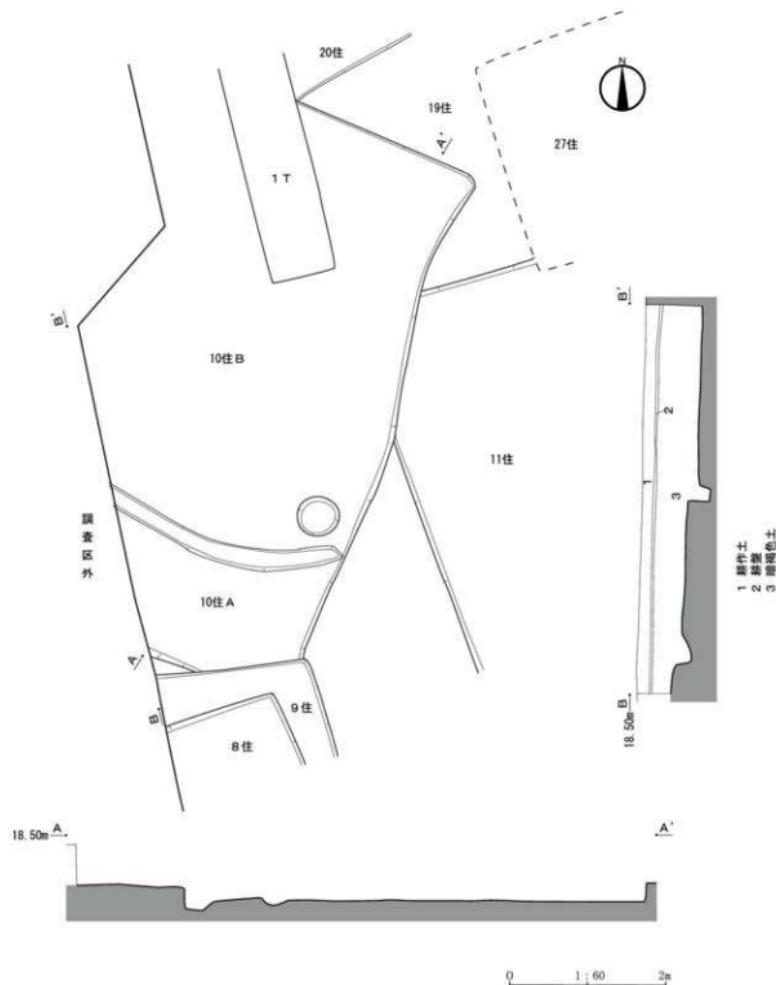
第10図 8号・9号住居 (1:40)

## 10号住居A・B（第11図）

**概要** 調査区中央部西側で確認された。範囲は調査区外西側に続いているため、全容の把握には至らなかつた。ほかの住居と重複して一部は消失しているが、Aの方が古く、Bの方が新しいと推定される。Aの東側と南側部分で壁の立ち上がりが確認された。

**遺構** B住居範囲内で年代、性格が不明な土坑を確認した。時期を推定できる遺物を伴わないので、住居との関係を示す情報を得ることはできなかった。また、B住居の周囲の一部には周溝が見られた。

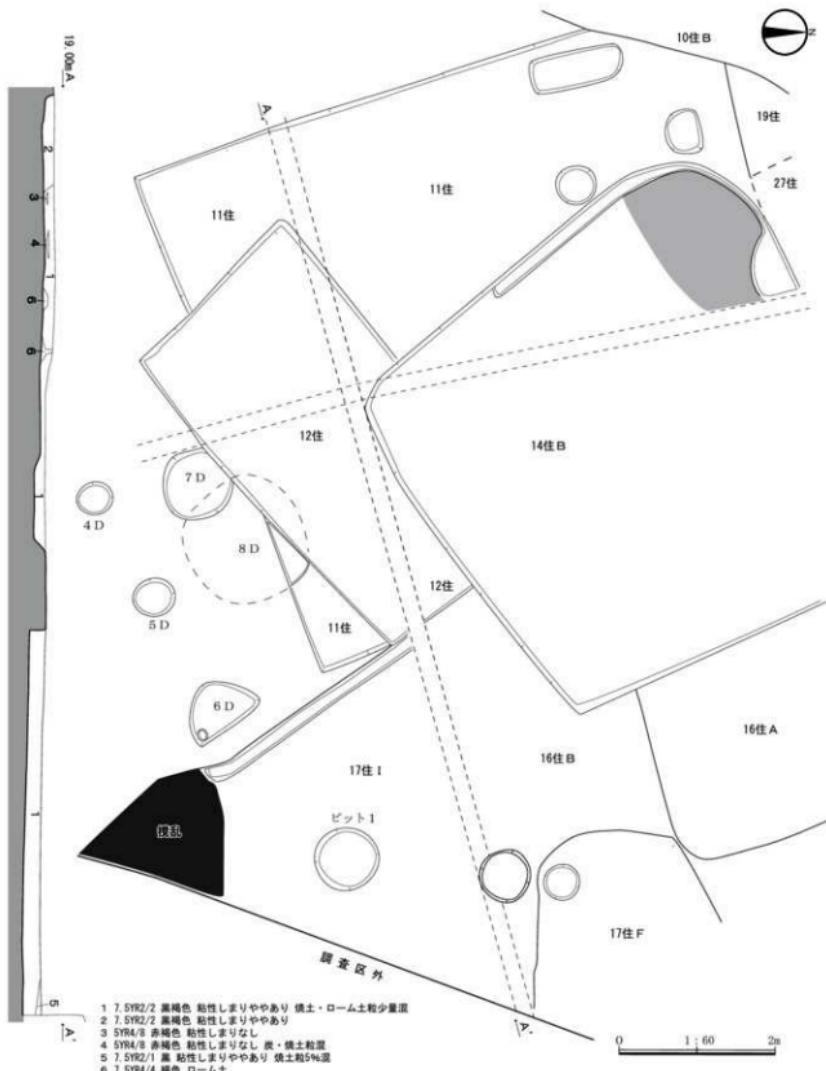
**遺物** それぞれ範囲内から少量の土師器片を確認した。



第11図 10号住居 (1:60)

## 11号・12号住居（第12図）

**概要** 調査区中央やや南付近で確認された。付近では遺構が密に重複しており、確認されたのはそれぞれの一部のみである。一部は14号住居とも重複する。両者は残存部から11号住居は一辺約7mのほぼ正方形、12号住居は短辺約2.7m・長辺約4.5mの長方形と見られる。重複の状況から、新旧関係は11号→12号→14号の順になると推定できる。当初は13号住居を独立した住居跡と判断していたが、精査の結果、11号住居の一部と判断して欠番とした。



第12図 11号・12号住居 (1:60)

**遺構** 11号住居範囲内では底面に掘り込みが確認されているが、いずれも性格は不明である。北西側で確認された土坑3基は床面からの掘り込みは浅く、特徴的な遺物は伴わない。南東側で確認された土坑も遺物を伴わないが、床面から深く掘り込まれている。土坑は床面を特に深く掘り込み、その範囲が住居範囲外及び12号住居の範囲に及んでいたため、11号住居に伴うものではないと見られる。

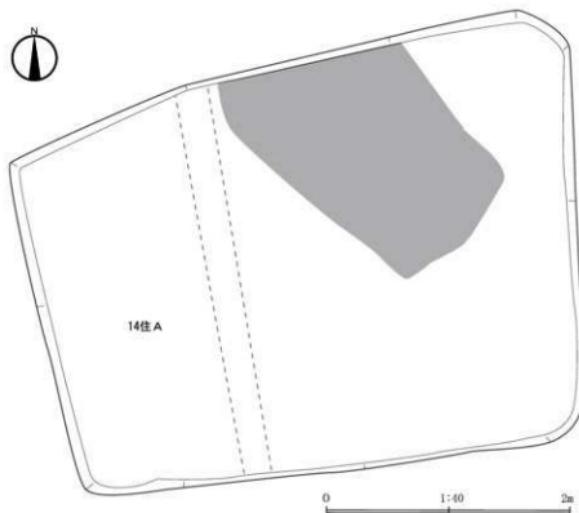
**遺物** 11号・12号住居とともに、出土遺物は6世紀後葉から7世紀後葉と見られる土師器が主である。確認された壺は中部に稜を持ち、口縁は内湾又は直立するものが多い傾向にある。また、壺は口縁に最大径を持ち、直線的な胴部を持つものが多い傾向にある。なお、12号住居からは黒曜石製の石匙1点が出土している。本住居は形状や出土遺物等から古墳時代の住居と推定される。これらの遺物は、覆土が形成される段階で流れ込み等により混じったものと思われる（第22図）。

#### 14号住居A・B（第13・14図）

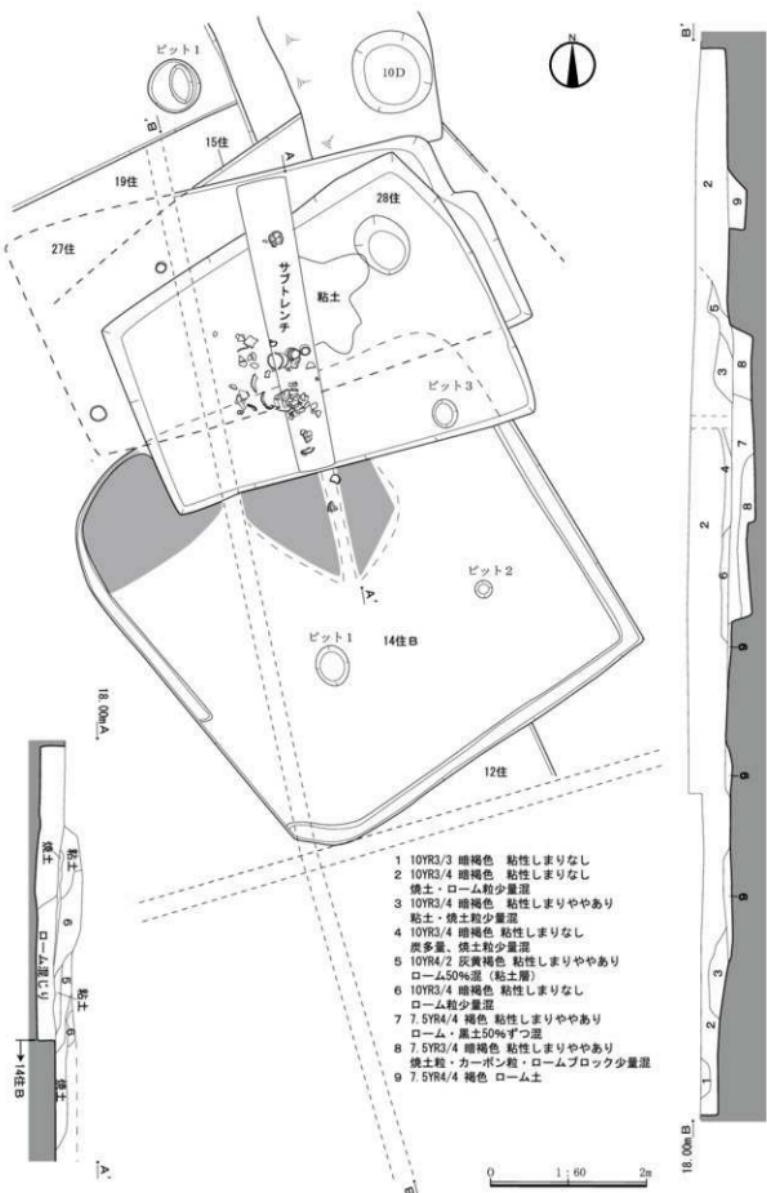
**概要** 調査区中央で確認された。一部はほかの住居との重複で消失している。残存する構造から、Bは東西約4.9m・南北約5.5mの正方形に近い形状と推定され、ほぼ全周で周溝が確認された。重複の状況から、隣接する15号住居より古いものと推定される。

**遺構** 床面の広い範囲で焼土が確認された。特に北側部分の堆積が顕著であった。また、遺物の中には炭化した植物片や種が確認できた。植物片はイネ科、種はバラ科のものである。本住居では強い熱の影響を受けた痕跡があるが、煮炊きの設備は確認できていない。一つの可能性として、住居北側で何らかの理由で出火し、住居に大きな被害を与え、屋根材（イネ科植物）や貯蔵食料（バラ科植物）を炭化させたことが推定できる。

**遺物** 遺物は土師器・須恵器、白玉・土錘等の土製品、有機炭化物など、様々なものが確認された。第23図-2は須恵器模倣壺蓋である。稜を持ち、口縁は内湾し、ナデが施される。形状から、土師器・須恵器は7世紀頃を中心とするものが多い。



第13図 14号住居A（1:40）



第14図 14号B・15号・27号・28号住居 (1:60)

## 15号住居（第14図）

**概要** 調査区中央部で確認された。確認できた範囲は台形状に残存した一部である。東西の長さは約46m、形状は方形と推定される。周辺は住居跡が密に重複し、隣接する14号・27号住居との前後関係を明確にすることはできなかった。

**遺構** 確認範囲の中央部に粘土塊が見られ、周辺に遺物が集中した。

**遺物** 完形の須恵器が複数出土している。第25図-1は土師器曾瓦である。底部の形状は平底、胴部は直線的に立ち上がり、口縁には横方向にナデ、外面にはヘラケズリの調整が縦方向に見られる。口縁は弱く外反する。遺物の年代は、6世紀中葉から後葉頃とみられるものが多い。（第24・25図）

## 27号住居（第14図）

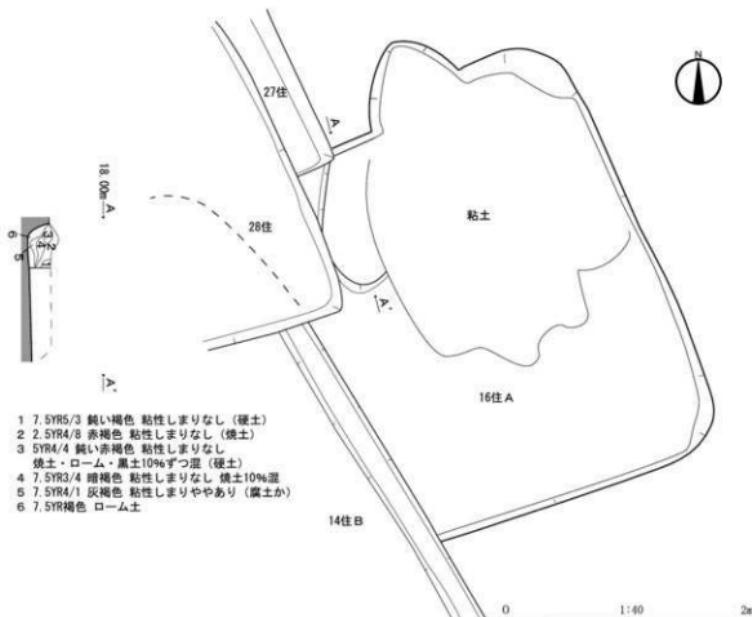
**概要** 調査区中央付近で確認された。15号住居と広範囲で重複する。確認できたのは一部のみで、大部分は重複により破壊されている。残存部分から従前の形状が方形と推定される。

**遺構** 住居に伴うものは確認できていない。

**遺物** 第26図-6は高杯の杯部である。脚部欠損。内面に棒状研磨、外面にヘラケズリを施す。ほかにもいわゆる国分式の杯も出土した。

## 16号住居A・B（第15図）

**概要** 調査区中央や東側で確認された。北側の16号住居Aの調査を進めた結果、南側に別の住居（16号住居B）を確認した。16号住居Aは14号A・15号住居と隣接し重複する。その形状はやや不整形な長方形と推定される。本住居では北側付近にカマドが見られ、その周辺の床面には厚く広がる粘土と焼土の塊がある。残存する遺構から住居の広さは1辺約3.5mと推定される。なお、16号住居Aの床面からは、本調査区で唯一の紡錘車（1個）が確認された。



第15図 16号住居 (1:40)

**遺構** 中央部に広く粘土が広がり、何らかの熱の影響が推定される。粘土の上に焼土が重なる。北側にはカマドがあり、その範囲からも粘土の堆積が見られた。南壁の一部には周溝が巡らされている。

**遺物** 土師器・須恵器などの他に、紡錘車や石製品が見られた。第26図-14は土師器小形壺である。形状からいわゆる鬼高分式と見られる。坏は数点見られたが、いわゆる国分式のものがあり（第26図-16～19）、本住居の年代を特定する指標となりうる。紡錘車の出土が確認できた。

## 17号住居群A・B・C・E・F・I（第16図）

**概要** 調査区中央東側で確認された。複数の住居が密な状態で重複しているため、住居の明確な新旧関係や個別の範囲を確定するに至らなかった。また、確認できたのは住居群の一部であり、調査区外の東にさらに広がる。貼り床を伴うもの、周溝を伴う住居が見られる。遺物も古墳時代中期以降から平安時代頃の特徴を持つものなど幅広く、住居の年代もこれらと同年代と推定される。

特徴的な遺物として、一部からは製鉄に関連する羽口の破片や、金属遺物（刀子）が見られた。

**遺構** 範囲内で焼土の広がりを確認できたが、羽口や金属遺物に関連する遺構を検出することはできなかつた。Bと推定される範囲で確認した焼土は薄く床面の広範囲に広がっていたが、その詳細は不明である。

住居は残存する部分から方形と推定されるものが多く、周溝や貼り床を持つものが見られる。AやCなど、北側の住居ほど床面が深く、これらは本調査区全体の傾向と合致する。

**遺物** 古墳時代中期から平安時代頃と推定されるものまで、広い年代の遺物が確認されている。

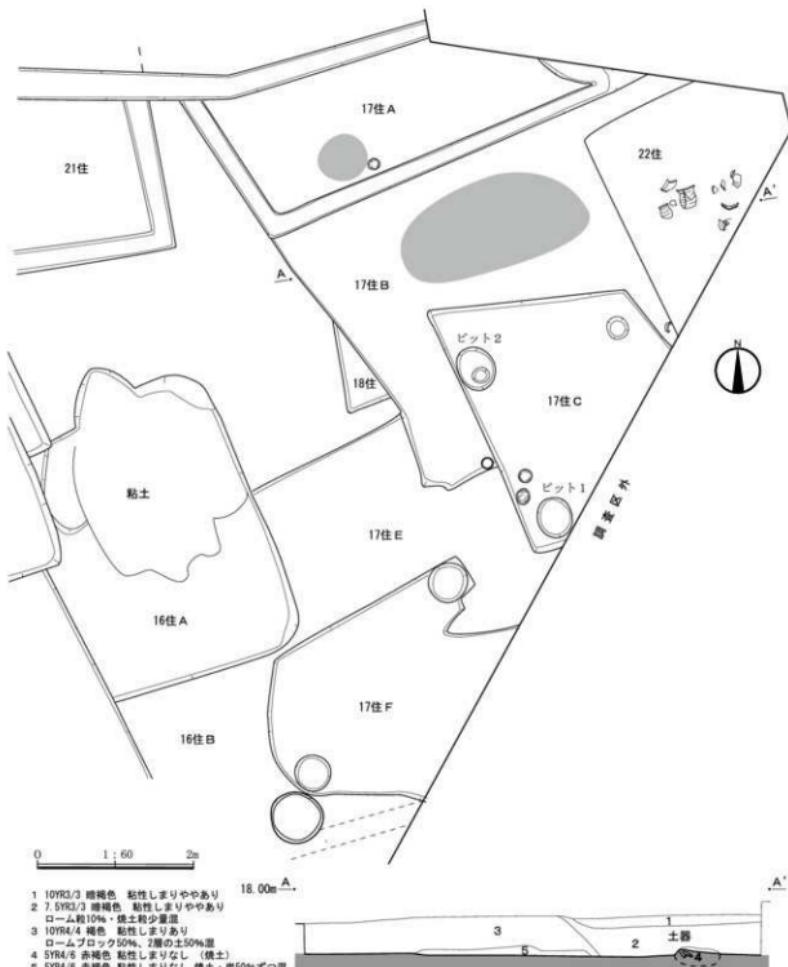
第27図-13は須恵器の高台付杯で、いわゆる国分式に並行すると考えられる。内面にナデが施され、口縁部はやや外反する。底部には静止糸切り痕が見られる。15は小型台付壺の脚部である。15は須恵器高杯の脚部である。スリット状の透かしが3ヶ所施されているが、大きさや位置は不均等である。土器以外の遺物も多く、10は口縁部に釉薬が施された磁器皿である。釉薬は一部剥落しているが、塗りにはややムラがある。羽口や刀子など、金属および金属に関連する遺物も見られた。

\* 17号住居群D・G・H：当初、独立する住居跡として調査が進められたが、調査及び精査の結果、隣接する他の住居跡の一部と判断されたため、欠番とした。

## 18号住居（第16図）

**概要** 調査区中央部東付近で確認された。残存する範囲はごく僅かであり、全容は不明である。重複する周辺の住居により大部分が消失しており、床面の一部を確認したに留まる。

**遺構** 住居に伴うものは確認されていない。  
**遺物** 確認されていない。



第16図 17号・18号・22号住居（1:60）

## 22号住居（第16図）

**概要** 調査区北東側で確認された。範囲は調査区外東側に広がり、全容は確認されていない。17号住居群と重複するが、その新旧関係は明らかでない。

**遺構** 住居に伴うものは確認されていない。

**遺物** 第28図-14は土師器の高壺脚部である。わずかに壺底部を残す。15は土師器壺の胴部から口縁部である。

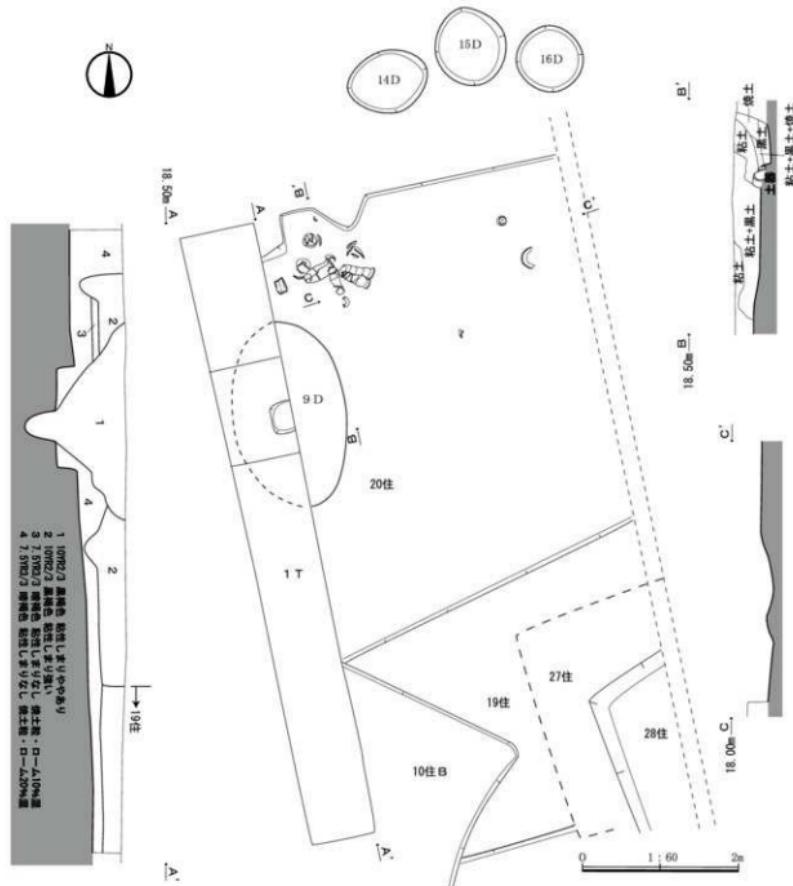
口縁と胴部の幅はほぼ等しい。形状から6世紀前葉から中葉のものと推定される。また、同住居からは石器1点が見られた。石匙の欠損または未製品と推察される。

## 19号住居（第17図）

**概要** 調査区中央西側で確認された。確認できたのは住居北西付近であり、範囲の大部分は他の住居との重複で消失したと推定される。重複の状況から、27号及び28号住居より古いと判断される。

**遺構** 住居に伴うものは確認されていない。

**遺物** 確認されていない。

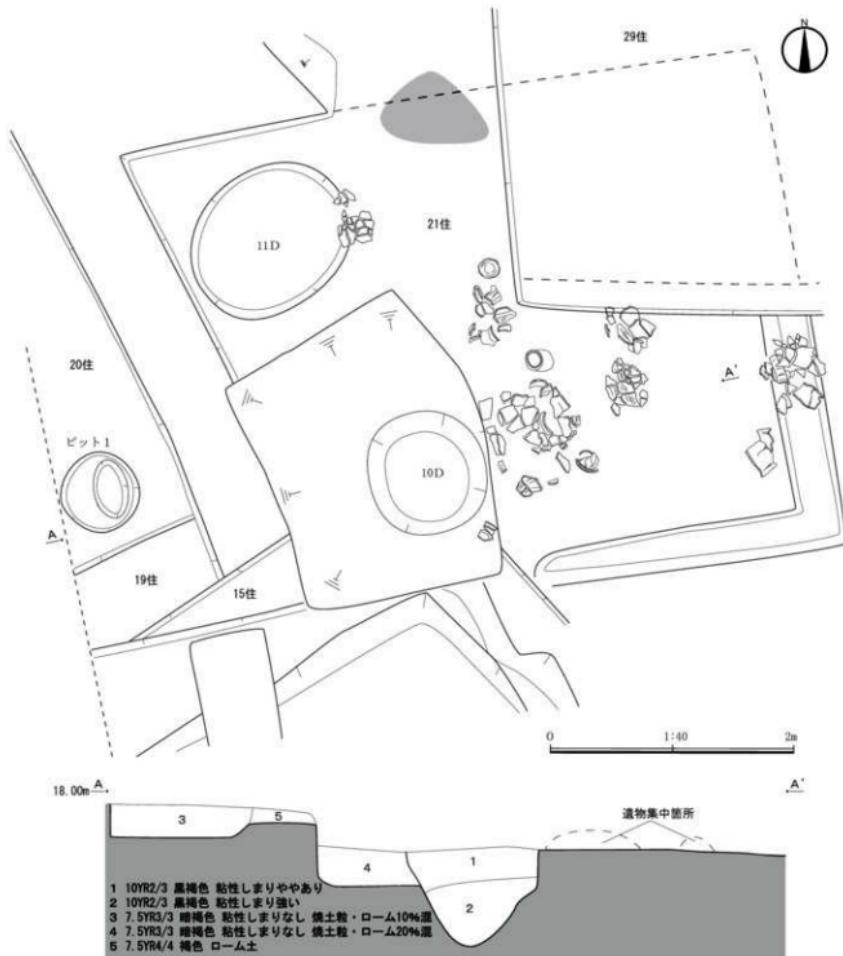


## 20号住居（第17図）

**概要** 調査区北西端付近で検出された。全体の範囲は明らかではないが残存部分から方形と推定され、1Tの西側、調査区外にさらに広がる。住居範囲北側でカマドが検出された。袖は一方のみ確認でき、周辺からは関連する遺物として、土師器質の長胴甕や壺等が確認された。遺物はカマド周辺に重なるように集中していた。

**遺構** いくつかの土坑が見られたが、規則性は見出せず、柱穴と判断できなかった。住居範囲内に設置したサブトレンチ内の底面下部より円形に深く掘り込まれた土坑が見られたが、遺物は伴わない。

**遺物** 第29図-9・10・11は土師器の長胴甕である。土師器の壺が数点見られたが、稜が明瞭でないものが多い。13・14は高台付杯であり、14には静止系切り痕をとどめる。



第18図 21号住居 (1:40)

## 21号住居（第18図）

**概要** 調査区中央部北側で確認された。住居内には遺物集中箇所が複数見られた。29号住居との重複により一部が失われているが、一辺4mほどの方形と推定される。南西部の床面が掘り込まれ土坑状になつており、その中からは遺物が多数出土した。

**遺構** 10土坑は径1mほどで、床面から2段階で掘り込まれている。遺物を伴うがその性格は明らかでなく、また、本住居に伴うものとも断定出来ない。中央北側には焼土が見られる。内部および周辺に遺物が見られた。また、南東部の壁の一部には周溝が存する。

**遺物** 土師器甕が複数出土した。胴部に最大径があり、口径に比して底面が狭いものが多い。土師器坏は明確な稜を中部に持ち、口縁は内湾する。6世紀葉から7世紀中葉が主と見られる（第30図）。

## 23号住居

**概要** 調査区北東隅に見られた。範囲は調査作業用の通路として設定した区画にあたっているため、範囲・詳細は今回の調査において明らかにするに至らなかった。

**遺構** 住居に伴うものは確認されていない。

**遺物** 少量の土師器片が出土した。

## 29号住居（第19図）

**概要** 調査区中央部北側付近で確認された。21号住居などと重複する。範囲内にベルトを設置して重複する住居との新旧関係の解明を目指したが、確定するに至らなかった。

**遺構** 住居に伴うものは確認されていない。

**遺物** 少数の土師器片が出土した（第31図）。

## 30号住居（第19図）

**概要** 調査区中央部北側付近で確認された。29号・17号A・31号・32号住居と重複しており、全容の解明に至らなかつたが、従前の形状は方形と推定される。壁面下に周溝を伴う。

**遺構** 中央付近に見られた土坑1基は床面を深く掘り込むが、遺物は伴わない。本住居の柱穴としては過大であり、遺物もないことから関係は明らかでない。北西隅に焼土の高まりがあり、一部は住居外に突出している。位置や形状からカマド煙道部と考えられるが、袖等は確認できない。

**遺物** 丸瓦1点が確認された。厚さは約1.7cm、内面の両端付近に特に鮮明な布目が見られ、外面には並行するヘラ調整痕をとどめる。確認できたのは1点のみで、本住居との関係は明らかでない。調査区ではほかに、重機による掘削の際、排土から布目瓦片1点が確認されている。こちらには内面全体に明確な布目が見られるが、破片であるため、こちらも詳細は明らかでない（第31図）。

## 31号住居（第19図）

**概要** 調査区北東付近で検出された。隣接する30号住居との重複により大部分が消失していること、23号住居が未調査であることから、全容の解明には至らなかった。東方向に広がり、従前の形状は方形と推定される。

**遺構** 住居に伴う遺構は確認されていない。

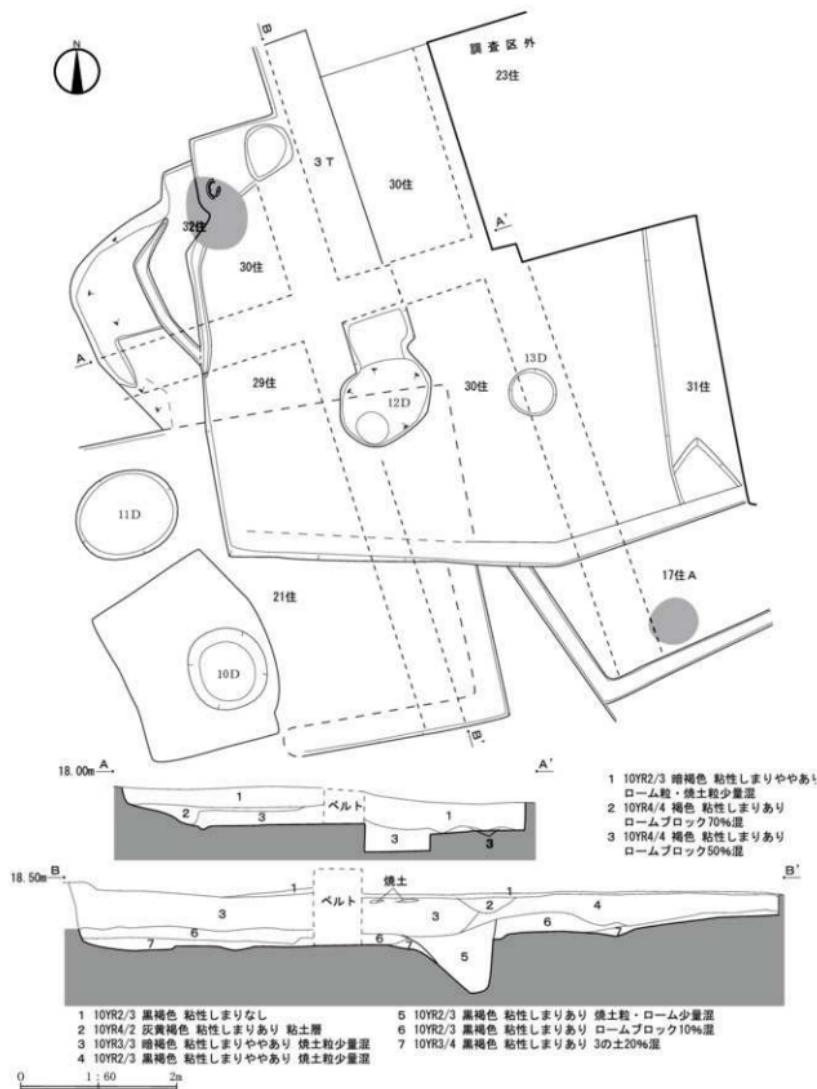
**遺物** 第32図-1は土師器甕底部である。長胴と推定される。平底で、表面にはヘラケズリの痕が縱方向に見られる。胴部の膨らみはやや直線的であり、形状から6世紀前葉から中葉と推定される。

## 32号住居（第19図）

**概要** 調査区北東付近で確認された。大部分は隣接する30号住居などとの重複のため消失している。確認できたのは北西隅部分で、周溝を伴う。

**遺構** 30号住居との境付近で床面上に焼土が見られた。

**遺物** 土師器が多く見られたが、これらは焼土内から検出された。第32図-6の土師器坏は下位に弱い稜をもち、口縁は外反する。6世紀後葉から7世紀中葉のものと見られ、そのほかにも同年代と推定される遺物が確認できた。

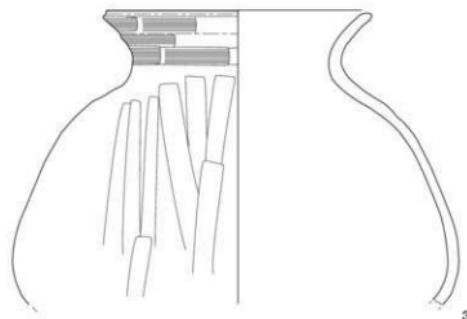


第19図 23号・29号・30号・31号・32号住居 (1:60)

<1号住居>



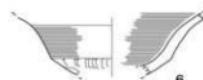
<2号住居>



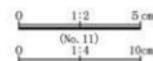
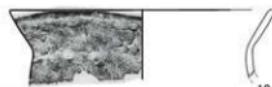
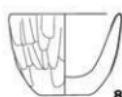
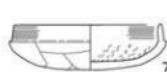
<5号住居>



<6号住居>

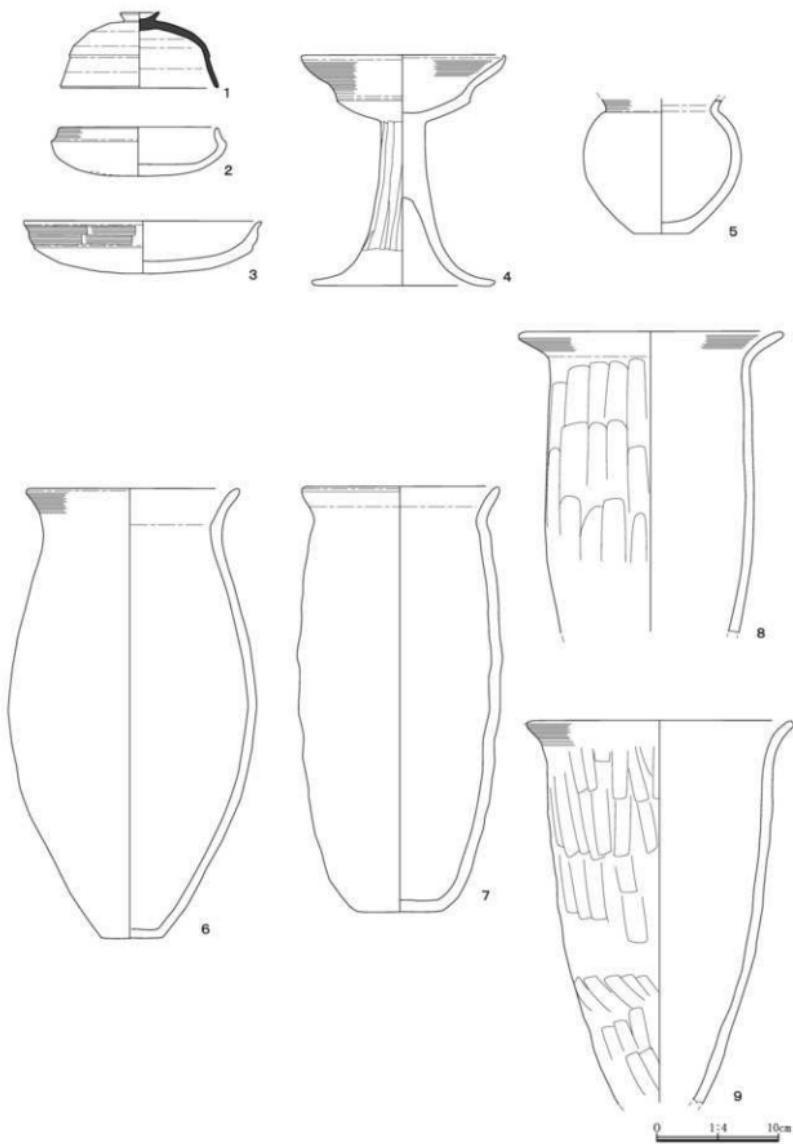


<24号住居>



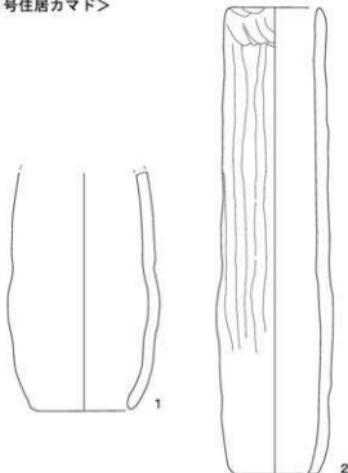
第20図 1号・2号・5号・6号・24号住居出土遺物(1:4)

<8号住居カマド>

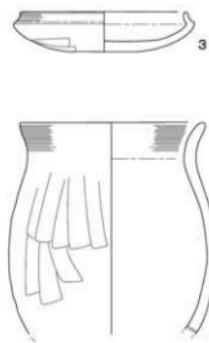


第21図 8号住居カマド出土遺物 (1:4)

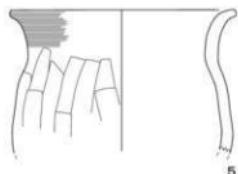
<8号住居カマド>



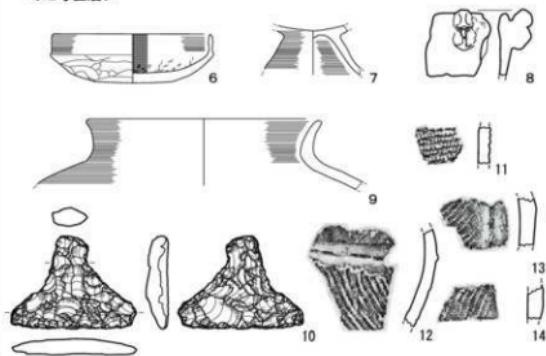
<8号住居>



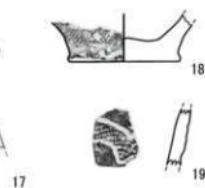
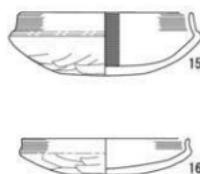
<11号住居>



<12号住居>

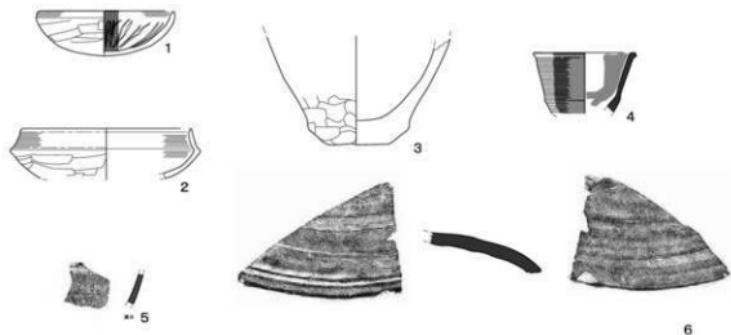


(13号住居)

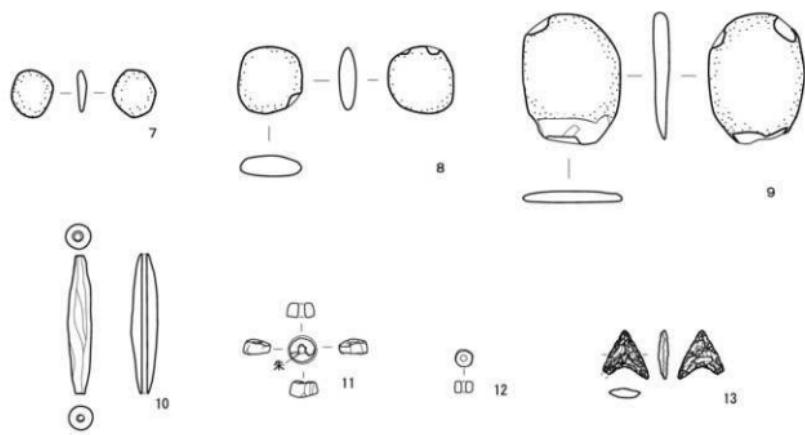


0 1:2 5cm  
(No. 10)  
0 1:4 10cm

第22図 8号住居カマド・8号・11号～13号住居出土遺物(1:4)

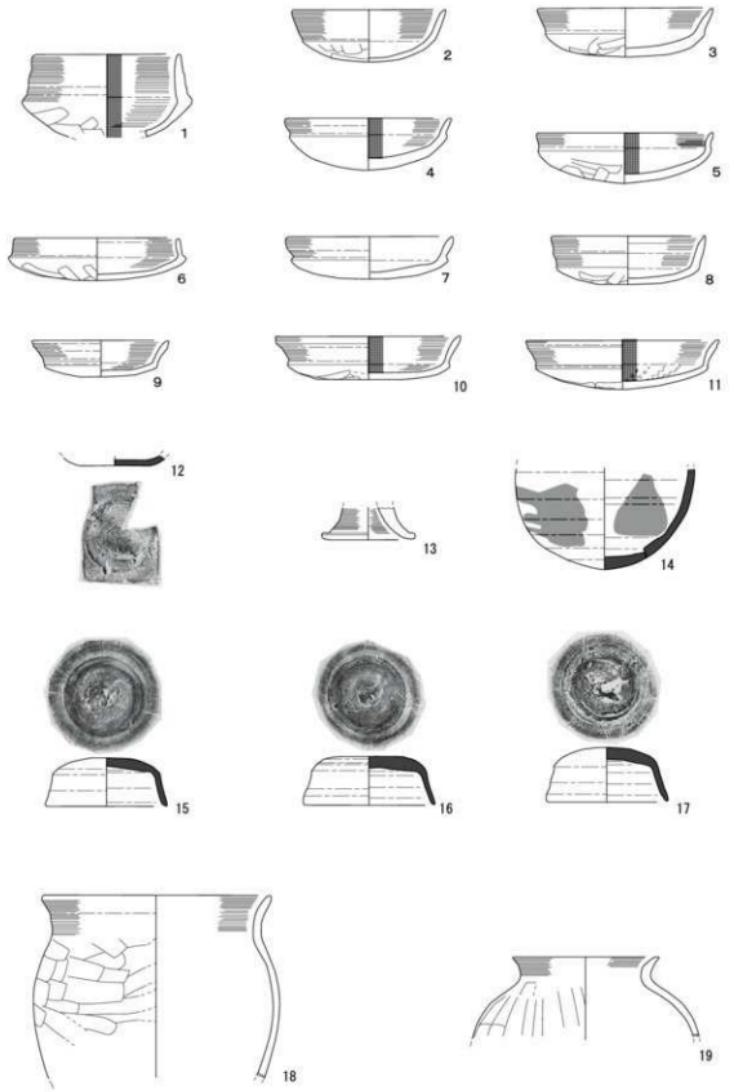


0 1:4 10cm



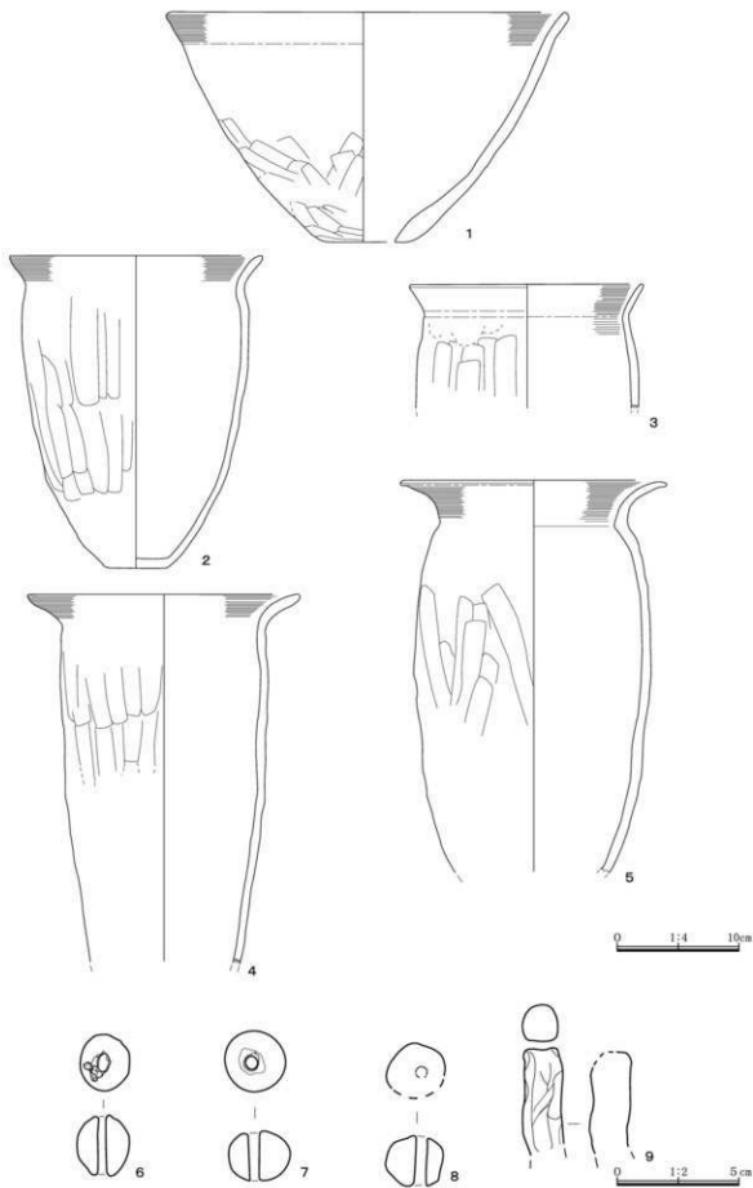
0 1:2 5cm

第23図 14号住居出土遺物(1:4)



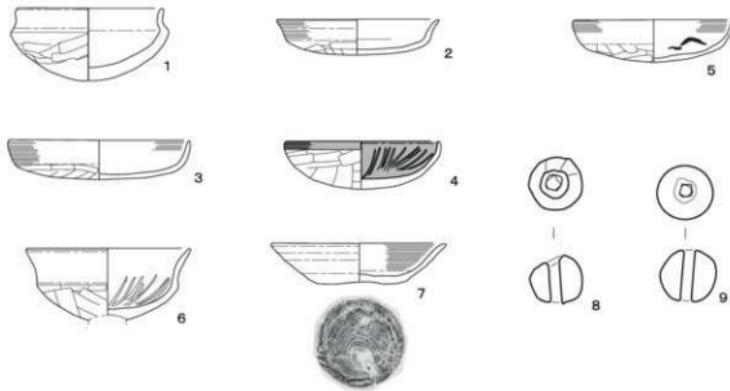
第24図 15号住居出土遺物①(1:4)

0 1:4 10cm

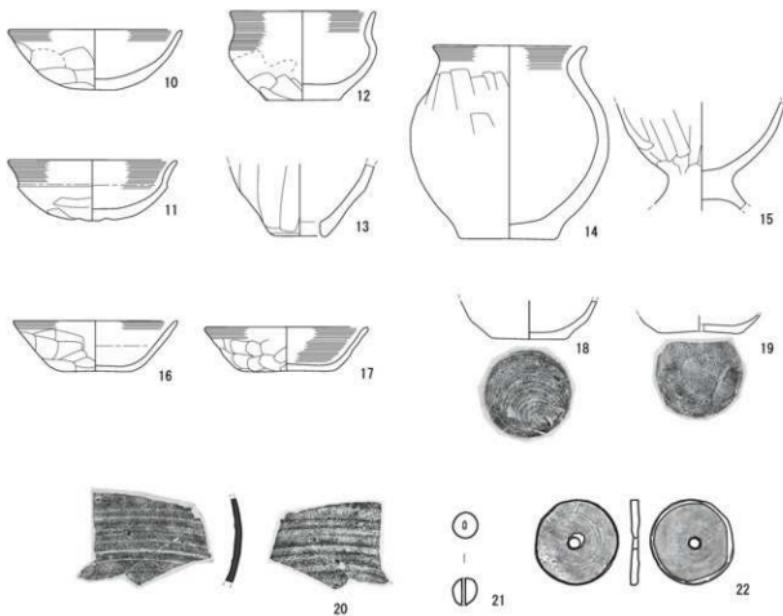


第25図 15号住居出土遺物②(1:4)

<27号住居>

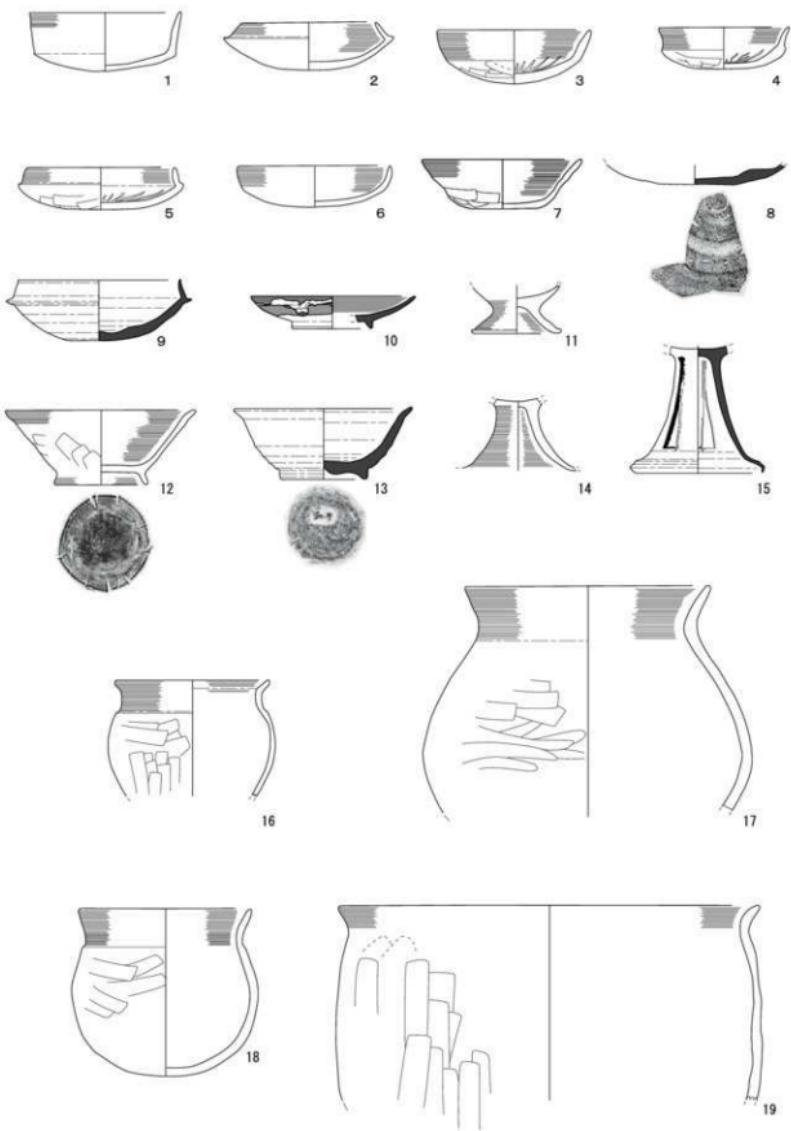


<16号住居>



第26図 16号・27号住居出土遺物(1:4)

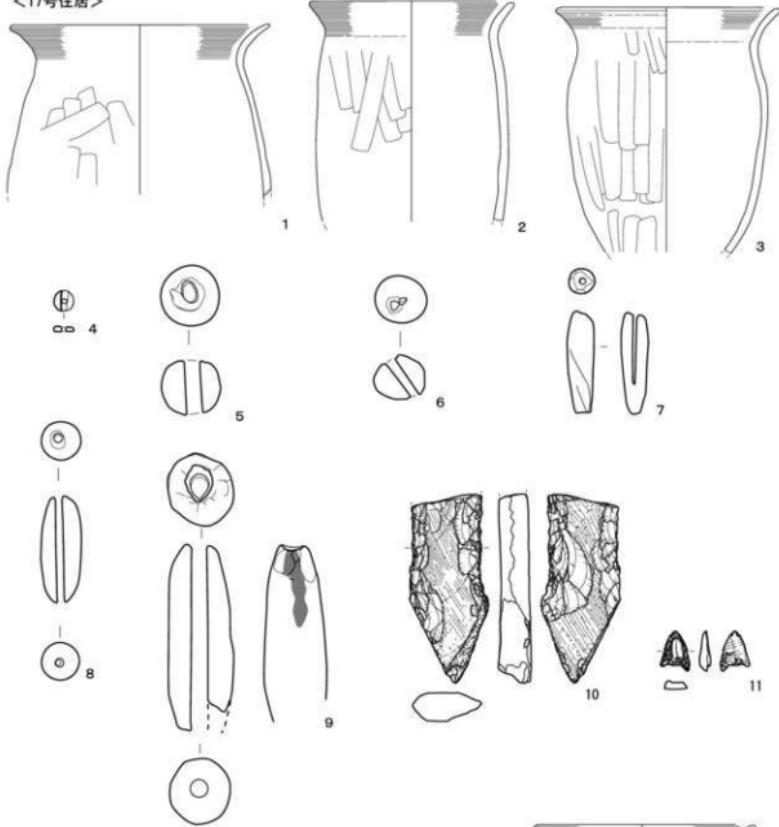
0	1:2	5cm
(No. 8・9・21・22)		
0	1:4	10cm



第 27 図 17 号住居群出土遺物 (1:4)

0 1:4 10cm

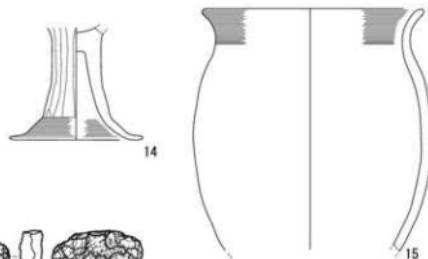
<17号住居>



<18号住居>



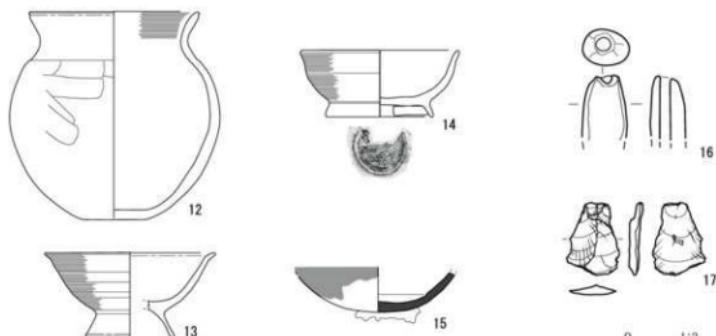
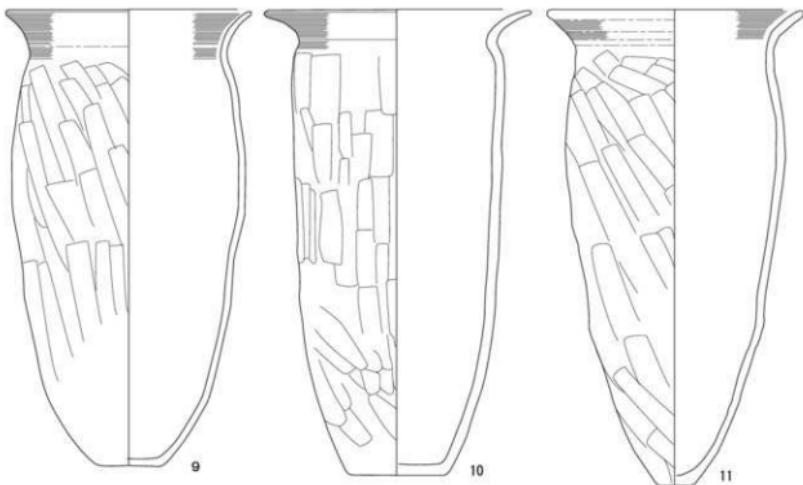
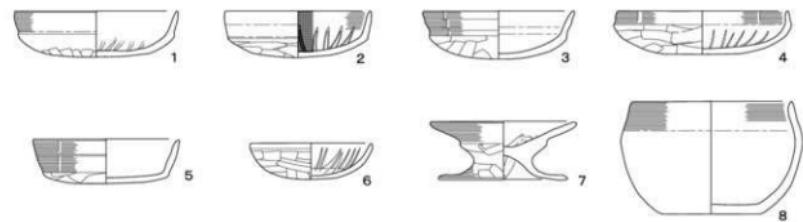
<22号住居>



0 1:2 5 cm  
(No. 4 ~ 11・13・16)  
0 1:4 10cm

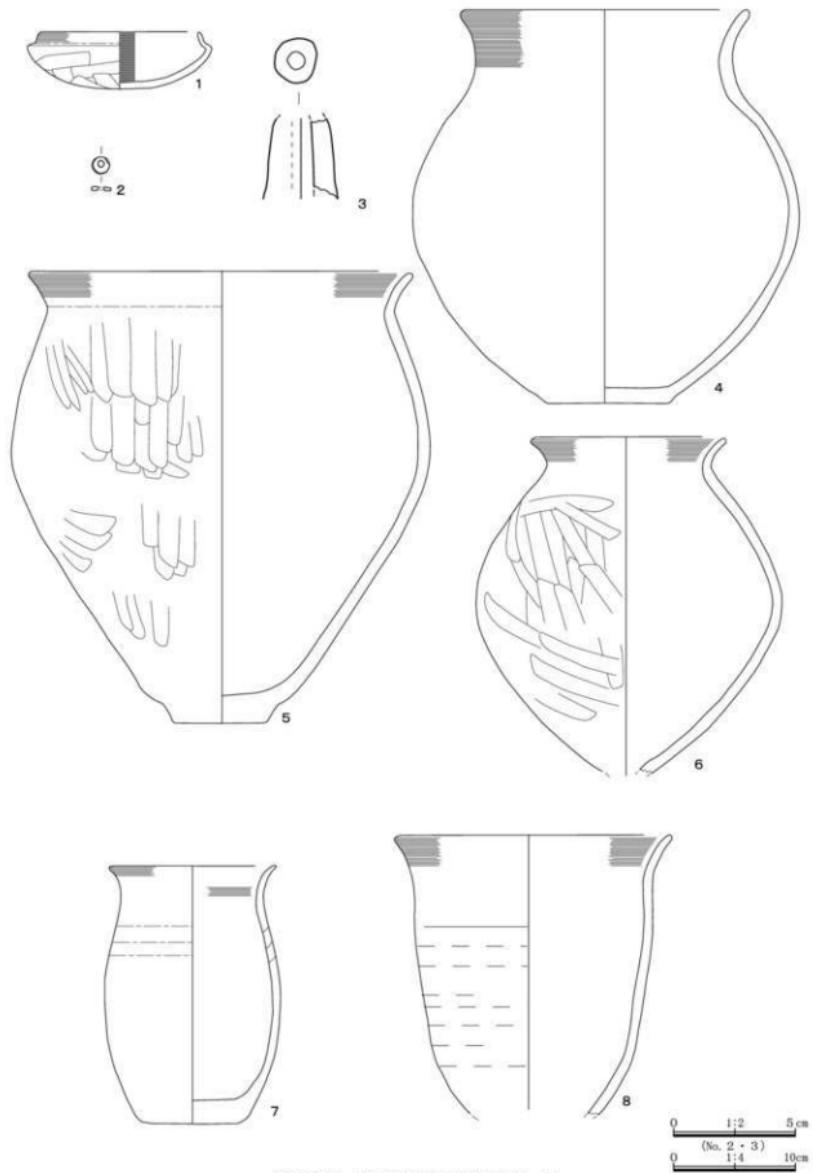
第28図 17号・18号・22号住居出土遺物(1:4)

<20号住居>



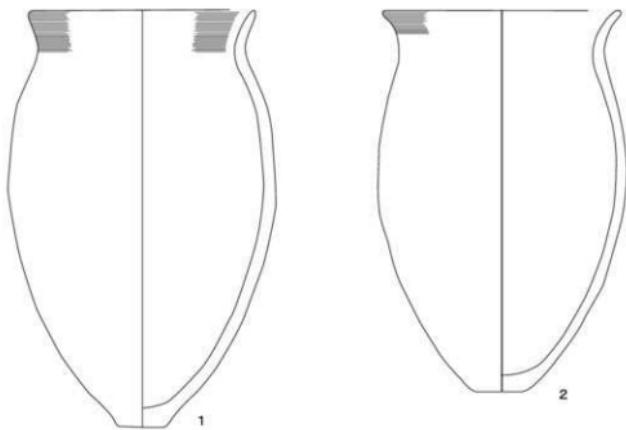
0 1:2 5 cm  
0 1:4 (No. 16・17) 10 cm

第29図 20号住居出土遺物(1:4)

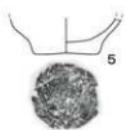


第30図 21号住居出土遺物(1:4)

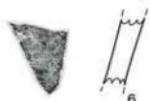
<21号住居>



<29号住居>



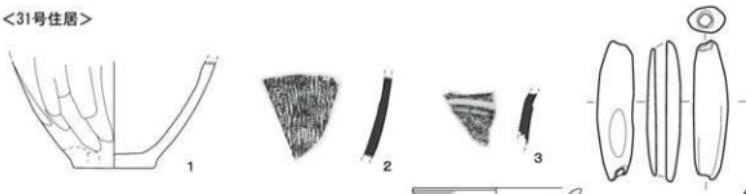
<30号住居>



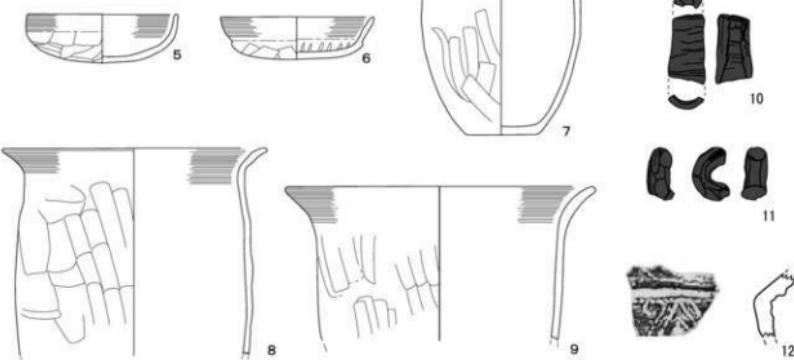
0 1:4 10cm

第31図 21号・30号住居出土遺物(1:4)

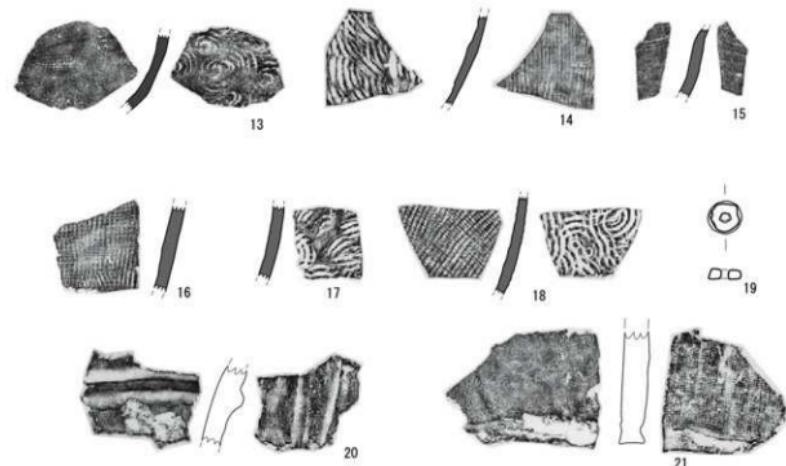
<31号住居>



<32号住居>



<調査区内表探>



0 1:2 5cm  
(No. 4 + 19)  
0 1:4 10cm

第32図 29号・31号・32号住居、覆土出土遺物(1:4)

## 第4章 まとめ

今回の調査は、約450m<sup>2</sup>の調査面積ながら30軒を超える住居跡が確認され、およそ5世紀末～9世紀の長期の間この地が生活場所として使われ続けていたことが確認でき、それに伴う豊富な資料を得ることができた。

出土遺物の大部分を占めるいわゆる鬼高期に属する土器は、1980年代後半から多くの編年案が示されているが（坂口1986、太田市1985など）、「邑楽」や「東毛」などの小地域圏での編年を基本とした生産と供給システムの解明が重要であるとされる（田中1995）。しかし、邑楽・館林地区についてはこれまで編年案が示されておらず、小地域圏単位の検討の進展が望まれていた。本遺跡では、住居の重複が激しく、カマドに伴う床面直上から出土した土器は、2号・8号・20号住居の遺物のみであり、住居への帰属が特定できるものが多いとは言えない。しかし、上記の状況と市内出土資料の編年研究が行われてきていない現状を鑑みると、今後の調査の指針とするためにも、本遺跡における資料の形態の特徴とその変化についての試案を示すことは必要であると考える。

そこで、形態を中心とした分類・変遷の設定に多くの疑義を挟む余地があることを承知しながらも、近隣地域の形態的特徴をもとにした編年を試み、周辺遺跡との関連も含めて所見を示しておく。

### 1・土器編年について

#### 分類と変遷の特徴（第1表・第2表）

环①～④類はいわゆる壺蓋模倣環であり、主に口縁部形状を中心に分類した。なお、編年表の各期は太田市の編年（太田市1985）を参考に、第Ⅱ期（5世紀末～6世紀初頭）、第Ⅲ期（6世紀前葉～6世紀中葉）、第Ⅳ期（6世紀後葉～7世紀中葉）、第Ⅴ期（7世紀後葉）に対応とした。

①類：口縁部が直立する。口縁部と体部を区画する稜は丸みを持つものが多い。本遺跡では第Ⅳ期のみ確認され、その中でも年代が新しくなるにつれ体部が浅くなり、底部形状が扁平になる。

②類：口縁部が外反する。丸味のある体部で、稜から直線的に立ち上がるaと外反の強いbがある。第Ⅲ期から第Ⅳ期になると、絶じて体部が浅くなる。横ナデにより体部との区別がある。

③類：明確な稜はなく、丸味のある体部から内湾気味になだらかに立ち上がる。

④類：丸味を帯びた底部から内湾気味に立ち上がる。口縁部と体部を画する稜がない。

⑤類：体部と口縁部を分ける明確な稜から口縁部へと内斜的に立ち上がるものの、いわゆる环身模倣環。次第に口縁部の高さが低くなり、稜も緩くなっていく。横ナデにより体部との区別がある。口縁部の立ち上がり方でaとbに分けた。

⑥類：口縁部が内側へ小さく屈曲する。いわゆる内屈口縁环。

#### 高环

短い脚部から「く」の字に外反するものや、脚部に対して深い环部をもち、口縁部と体部を画す稜から外傾するものが第Ⅱ期に相当する。その後、長脚化していく。

#### 長脚環

①類：丸味のある体部で、最大径が胴部上部にくる第Ⅱ期から徐々に長脚化していく。

②類：丸味が少なく寸胴に近い胴部を持つが、底部にいくにつれ先細りしていく。第Ⅱ期から徐々に長脚化し、第Ⅴ期で長脚化が完成する。

8号住居の煙道とカマドの袖の部材を第Ⅳ期に設定し、天井部は第Ⅴ期に設定した。

#### 小形甕

第Ⅱ期は扁平な球状を呈する胴部を持ち口縁部が緩く外反する。第Ⅲ期では胴部の球状化が進み、第Ⅳ期では小形ではあるが長脚化する。

#### 広口甕

口縁部が広く、胴部最大径を中位に持つ甕。小さい底部から直線的に立ち上がるものを第Ⅳ期とした。

#### 壺

くの字状に屈曲する口縁部で、球形の胴部を持つ。底部欠損はあるが、最大径から底部に向かい急に窄まるものを第Ⅱ期とした。

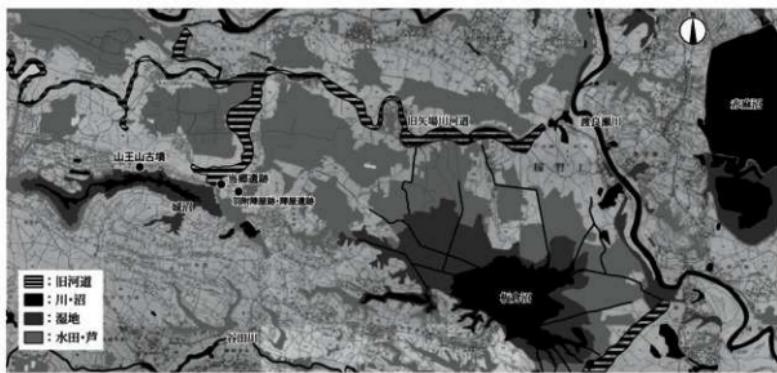
#### 瓶

鉢形を呈し、直線的に口縁部へと立ち上がるものを第Ⅱ期とした。

## 2・当郷遺跡と周辺遺跡

以上の編年の結果、本遺跡で今回確認できたのは主に第Ⅱ期～第Ⅴ期の遺物であり、特に第Ⅳ期の遺物が種類・量共に充実していた。その後、いわゆる国分式土器の出土もみられることから、長期間居住生活を行っていたことが改めてわかる。

第33図は、明治17年の迅速測図（フランス式）に川や水田などの範囲を加筆したものである。城沼や板倉沼を中心に多くの河川に囲まれ肥沃な土壤が形成される氾濫原であり、広大な可耕地であったと考えられる。また、昭和31年の地形図に照らし合わせると（第34図）、本遺跡は城沼北岸に細く伸びる台地の舌状に張り



第33図 迅速測図にみる周辺の湿地帯 (1:75000) (明治17年 迅速測図に加筆)



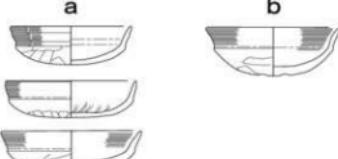
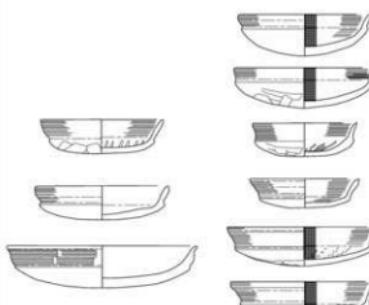
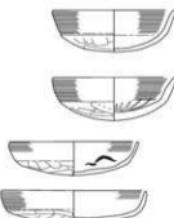
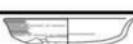
第34図 昭和31年館林市内地形図 (1:10000)

出した場所に立地しており、遺跡北東には緩い谷が広がっている。ここで特筆される点はこの谷を形成したのが旧矢場川ということである。第33図の旧河道は国土地理院が公表しているものを参照にしたものである。これだけで当時の流路を復元することはできないが、当郷遺跡の台地崖線部まで流路であった時期があることが示され、この地が城沼だけでなく矢場川の流域も押えられる重要な場所であった可能性がある。周辺遺跡であげた羽附陣屋跡・陣屋遺跡も、標高差1m以下の台地上の端部に立地しており、同じく古墳時代の住居跡が確認されている。市内の遺跡で、本遺跡と同様に第Ⅳ期の遺物が多く出土した北近藤第一地点も、近藤沼を望む台地上に集中的に住居が形成されていることから、沼や川の分岐点付近を遷地し、物流の要所を押さえ、潤沢な可耕地を背景に大集落へと発展していった可能性をみることができる。沼沢地周辺部においてこの時期の活動痕跡が多く確認されるのは、こうした可耕地の開発を可能にした技術の工夫や労働力の集約といった社会基盤の形成があったことも想定される。

当郷遺跡の周辺で同じく城沼を望む台地に立地するのが、全長40m余の前方後円墳で市指定史跡の山王山古墳である。同古墳は昭和13(1938)年刊行の「上毛古墳綜覧」で「郷谷村第一号 山王山」として記載されており、周辺には円墳のあったことが確認されている。墳丘は一段築成で、昭和59年(1984)度に作成された墳丘測量図によると、前方部幅16m以上(前方部前端高: 約21.8m)、くびれ部幅14m前後、後円部径28m前後(後円部高: 約23.2m)で、その形態的特徴から6世紀後半の築造であると考えられている(館林市教育委員会2011)。

本遺跡の出土遺物は、その年代に幅を含んではいるが、山王山古墳の造営時期と同時期に出土遺物の量が増加していることと、大規模集落であった可能性を積極的に解釈するならば、古墳に埋葬されるような豪族の成立の背景には、豊富な可耕地の掌握と地域統合力が背景として考えられる。当郷遺跡はそのような背景をうかがい知るための手がかりになる遺跡であり、古墳の造営に関わった人びとと関連する集落であった可能性もある。今後そのようなことを念頭に調査を進めて地域形成の過程を明らかにするとともに、邑楽・館林地域の歴史を人びとの生活の歩みの視点から辿っていく必要がある。

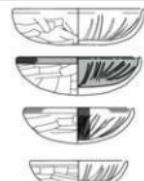
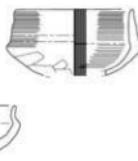
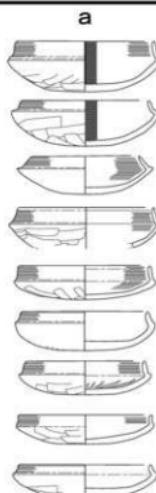
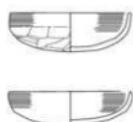
第1表 当鄉遺跡出土遺物編年表（环）① (1:5)

時 期	坏①類	坏②類	坏③類
第Ⅲ期			
第Ⅳ期			
第Ⅴ期			

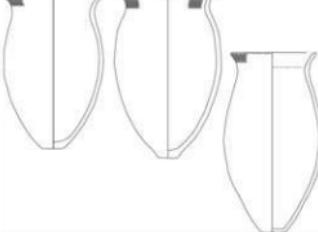
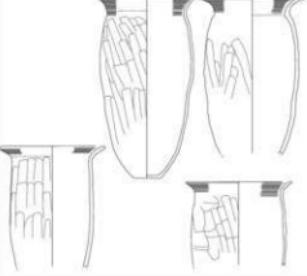
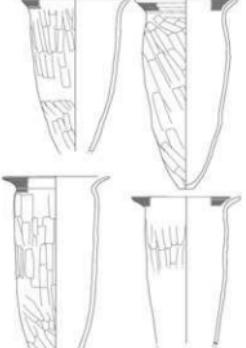
坏④類

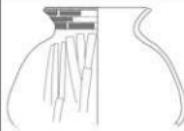
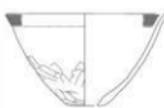
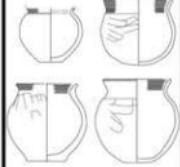
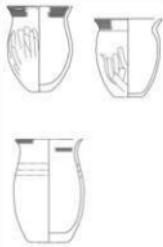
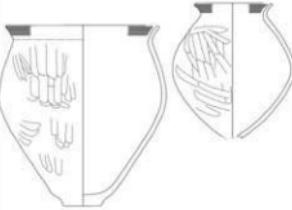
坏⑤類

坏⑥類



第2表 当鄉遺跡出土遺物編年表② (1:10)

時 期	高坏	長胴甕①類	長胴甕②類
第Ⅱ期			
第Ⅲ期	 		
第Ⅳ期	 		
第Ⅴ期			

	小形甕	廣口甕	壺	飴
				
				
				

## 参考文献

- 太田市教育委員会 1985 「市内遺跡 II」  
太田市教育委員会 1987 「渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報」  
太田市教育委員会 1988 「渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報」  
(公)群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2005 「群馬の遺跡 7 中世～近代」  
坂口 一 1986 「古墳時代後期の土器編年」群馬文化 208 号  
館林市教育委員会 1974 「館林市双書第 4 卷」  
館林市教育委員会 1988 「館林市埋蔵文化財発掘調査報告書」第 20 集  
館林市教育委員会 1998 「館林市埋蔵文化財発掘調査報告書」第 31 集  
館林市教育委員会 2009 「館林市における土師器皿の変遷」「市史研究おはらき」  
館林市教育委員会 2010 「館林市特別編第 4 卷 館林城と中近世の遺跡」  
館林市教育委員会 2011 「館林市資料編第 1 卷 館林の遺跡と古代史」  
田中広明 1995 「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向」東国土器研究

遺物觀察表①

遺物番号	住居番号	器種	高さ (測定高)	口径 (測定幅)	年代	残存率	成形の特徴等	開口部の特徴等	備考
第1回	1 IH	小形鉢	6.5	11.9	6～7世紀	底部	丸底、底部から側部はややかに立ち上がる	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、底部ヘラケズリ	
	2 *	鉢	11.7	16.4	IV	1/3	わずかな棱をもつ、口縁部は外反し	【内】口縁部ナデ【外】口縁・脇部に横ナデ	
	3 2H	壺	11.5	18.6	II	口縁部のみ	側部大きく膨らむ、口縁部は外反し側部にかけてS字を呈する、後ろ右肩含む	【内】口縁部ナデ【外】側面にS字、底部ヘラケズリ	二次焼成を受ける
	4 5H	环	3.7	13.6	V	1/2	平底、底部から腰やかに立ち上がる、口縁部内凹する	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ	
	5 6H	小形甕	17.5	13.4	IV	3/5	側部大きく膨らむ、口縁部外反し、口縁部から側部は「く」の字形を呈する	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、側部ヘラケズリ	外縁に二次焼成を受ける
	6 *	高杯	6.9	—	IV	—	平底、口縁部外反し、底部に棱をもつ	【内】口縁部ナデ【外】側部ナデ、底部ヘラケズリ	
	7 24H	环	3.7	11.4	IV	4/5	丸底、口縁部やや内凹する、底部に明確な棱をもつ	【内】口縁部ナデ【外】側部ナデ、底部ヘラケズリ	二次焼成を受ける
	8 *	手捏ね土器	6.7	9.2	6～7世紀	4/5	平底、底部から腰やかに立ち上がる	【内】口縁部ナデ【外】側面にS字、底部ヘラケズリ	
	9 *	甕	6.4	17.4	6世紀	II	口縁部1/3	【内】口縁部ナデ【外】腰やかに外反する	二次焼成を受ける
	10 * 長脚甕	5.7	21.8	IV	—	口縁部	口縁部腰やかに外反する	【内】口縁部ナデ【外】腰やかに外反する	
	11 *	土玉	—	—	—	1/2	中央部大きく膨らむ、中央部下に直穴	—	
第2回	1 丽 サマF	丽窓包環壺	6.2	13.0	5～6世紀	完形	底部に棱をもつ、下段から若干外反する	【内】口縁部ナデ【外】側面にS字、上部わずかにヘラケズリ	
	2 *	环	3.3	13.4	IV	完形	丸底、底部から腰やかに立ち上がる、上部の襷か口縁部内凹する、口縁部は若干外反する	【内】口縁部ナデ【外】側面にS字、ヘラケズリ	
	3 *	环	4.3	19.6	IV	完形	丸底、下段に棱をもつ、底部から口縁部へ腰やかに外反し立ち上がる	【内】口縁部ナデ	底部に二次焼成を受ける
	4 *	高杯	18.9	16.9	IV	4/5	底部に腰をもつ、腰から口縁部へ強く外反し、口縁部やや内凹する、底部から腰やかに膨らむ	【内】口縁部・側部内凹ナデ【外】側部ナデ、腰やかに外反する	
	5 *	小形甕	11.0	4.6	III	口縁部欠	平底、側部に最大膨らみをもつ、口縁部は外反する	【内】腰や・側部ヘラケズリ、口縁部ナデ	
	6 *	長脚甕	37.0	17.4	IV	4/5	平底、側部に最大膨らみをもつ、口縁部は外反する	【内】口縁部ナデ【外】側部ケズリ	
	7 *	長脚甕	35.0	16.2	IV	口縁部一部欠	口縁部は外反する、などらかに底部に凹る	【内】輪郭の有無明【外】竪方向のケズリ	外縁に二次焼成を受ける
	8 *	长脚甕	22.0	24.6	IV	1/2	口縁部は強く外反する、底部は直腹を呈す	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	一部に二次焼成を受ける
	9 *	长脚甕	35.5	21.9	V	1/5	口縁部は強く外反する、底部は直腹を呈す	【内】口縁部ナデ【外】ヘラケズリ	
第3回	1 *	筒状土器	19.5	8.0	6～7世紀	ほぼ完形	上部が内凹し下段にかけ側部は直腹を呈する、底部の直腹は半円に成される	【内】側部ヘラケズリ、輪郭み痕残る	外縁粗熱による剥離
	2 *	筒状土器	38.5	7.6	6～7世紀	完形	底部から半周で調節する	【内】輪郭み痕残【外】竪方向のヘラケズリ	
	3 8H	环	4.0	13.0	IV	完形	丸底、底部から腰やかに立ち上がる、上部の襷か口縁部へ内凹する、口縁部は若干外反する	【内】口縁部ナデ【外】輪郭み痕残る	外縁一部剥落する
	4 *	长脚甕	37.3	15.2	III	1/2	口縁部は若干外反し、底部なし、下段から腰やかに立ち上がる	【内】口縁部ナデ、輪郭机あり【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	5 11H	长脚甕	11.5	18.6	6世紀	破片	口縁部は「く」の字形に外反する	【内】ナデ【外】口縁部丁寧なナデ、口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	6 12H	环	3.9	13.4	IV	2/3	丸底、底部に棱をもつ、直底より腰やかに立ち上がる、腰より口縁部はやや内凹して立ち上がる	【内】側部研削痕、口縁と直部接合ナデ【外】底部ヘラケズリとタキ、口縁部ナデ	内・外に二次焼成を受ける
	7 *	高台付甕	3.5	8.0	5～6世紀	甕と高台の接続部のみ	底部に赤通り施釉をもつ	【内】横ナデ、ヘラケズリ【外】横ナデ	
	8 *	漆钵	—	—	織文時期	口縁部片	口縁部に二段の把手をもつ、口縁部はやや内凹する	【内】横ナデを施す	
	9 *	壺	5.5	19.6	6～7世紀	口造1/3	口縁部はわずかに外反する。側部が膨らみ直部は張り出す	【内】口縁部ナデ【外】口縁と直部にナデ	
	10 *	石瓶	—	—	绳文時代	完形	黒曜石	長380mm・幅54mm・厚91mm・重量115kg	測定エリア
第4回	11 *	漆钵	—	—	黑浜式	胴部	黒曜石を多く含む	【内】輪郭に幾次瓦を施す	
	12 *	深钵	—	—	加賀陶E式	口縁部	口縁部に棱をもつ、その下段にナデを施す	【内】側部に幾次瓦を施す	
	13 *	漆钵	—	—	阿玉代式	胴部片	口縁部に若干内凹し棱をもつ。側部はすばり足笠に至る、蓋母舟を含む	【内】側部に幾次瓦を施す	
	14 *	漆钵	—	—	加賀陶E式	胴部片	側部瓦好	【内】側部に幾次瓦を施す	
	15 13RH	环	15.2	4.8	IV	1/2	丸底、中部に明確な棱をもつ、口縁部は内凹する	【内】口縁部ナデ【外】底部ヘラケズリ	内・外縁全体に二次焼成を受ける
	16 *	环	4.0	6.7	IV	2/3	丸底、中部に明確な棱をもつ、口縁部は内凹する	【内】口縁部ナデ【外】底部ヘラケズリ	内・外縁全体に二次焼成を受ける
	17 *	长脚甕	22.6	11.3	IV	口造1/5	わずかな棱をもつ。口縁部は強く外反する。イヤセヒ含む	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、側部に強烈なケズリ	
	18 *	漆钵	—	90	織文中期	底部	平底、底面を研磨する。底部から側部は緩やかに立ち上がる	—	
	19 *	漆钵	—	—	弥名寺式	胴部片	—	【内】模文式を施し磨削	
第5回	1 14H	环	4.1	11.2	V	3/4	丸底、側部が直腹のままで、底部はやや内凹、ケイセヒ含む	【内】側部研削痕、ケズリ【外】ヘラケズリ	
	2 *	环	4.3	13.9	IV	底部一部	中部に棘をもつ、口縁部はやや内凹して「く」の字形を呈する	【内】口縁部ナデ【外】口縁部わずかに外反し	内外面に一部黒色施色を施す
	3 *	甕	8.5	5.1	—	底部	平底、底部特に厚く成形	【内】横ナデ【外】底部にヘラケズリ	黒色施色を施す
	4 *	錐瓶	50.0	8.4	6世紀	口縁部	口縁部は口縁部に立ち上がり、さらに成形する下段に緩やかな棱をもつ。口縁部は	【内】ナデ、一部に輪郭	
	5 *	錐瓶破片	3.5	3.0	—	破片	—	【内】ナデ、側部によるケズリ【外】直部	
	6 *	錐瓶器	4.1	11.2	—	口縁一部	口縁部が強く外反する	【内】側部研削痕、ケズリ【外】右方向でヘラケズリ	
	7 *	石瓶	18.6	0.6	—	完形	黒曜石を呈す。円形容	表面を滑らかに調整する	
	8 *	石瓶	2.6	1.2	—	完形	薄青色を呈す。やや不整形容な方形	表面を滑らかに調整する	
	9 *	石瓶	4.0	0.6	—	完形	灰白色を呈す。やや不整形容な方形	窓部一部欠損、表面に擦傷が見られる	
	10 *	土器	—	—	—	完形	褐色を呈す。施成が好	外縁は滑らかにナデ調整が施される	

遺物觀察表②

図版番号	住居番号	器種	高さ （残存部）	口径 （残存部）	年代	残存率	成形の特徴等	調整の特徴等	備考
第23 26	11	14H	白玉	0.6	1.0	—	壳形 外面は台形を呈す。中央に貫穴	—	貫穴附近にわずかに朱が見られる
	12	* 石製臼玉	0.5	0.7	—	完形	中央に貫穴	—	
	13	* 石鏡	—	—	魂文	—	チャート。一部欠損	長198cm・幅187cm・厚0.40cm・重量0.92kg	二次焼成を受ける
	1	15H	环	6.8	12.0	III	1/3 下部に縫をもつ。底部から縫まで縫やかに立ち上がる。口縫部はやや内凹する	【図】ナデ【例】ロクロによるケズリ痕	二次焼成を受ける
	2	*	环	4.3	12.6	N	口縫部 一部欠	丸窓。口縫部は外反する。下位に縫をもつ	【図】ナデ【例】ナデ。底部にヘラケズリ
	3	*	环	4.0	14.4	N	2/3	口縫部にかけ縫やかに外反しづらし上がる	【図】ナデ【例】口縫部ナデ 底部ヘラケズリ
	4	*	环	4.3	13.6	N	3/4	中部に縫をもつ。底部は概ねヘラケズリ、底部から縫やかに外反する	【図】ナデ【例】口縫部ナデ 一部黒彩を施す
	5	*	环	4.2	14.4	N	1/2	中部に縫をもつ。底部は概ねヘラケズリ、底部から縫やかに外反し立たせる	【図】ナデ【例】口縫部ナデ 全体的に黒彩を施す
	6	*	环	3.5	12.6	N	3/4	底部から縫まで縫やかに立ち上がる。縫から上部は必ず内凹する	【図】ナデ【例】口縫部ナデ 底部ヘラケズリ
	7	*	环	3.5	12.6	N	4/5	丸窓。底部から口縫部は縫やかに外反して立ち上がる。下位に縫をもつ	【図】ナデ【例】ナデ。底部にヘラケズリ
	8	*	环	4.0	12.6	N	3/4	底部から縫やかに立ち上がる。縫から若干垂れに立ち上がる	【図】ナデ【例】口縫部ナデ 底部ヘラケズリ
	9	*	环	3.0	11.2	N	口縫部 一部欠	口縫部は外反する。下位に縫を持つ	【図】ナデ【例】底部ヘラケズリ、口縫部ナデ 一部黒彩を施す
	10	*	环	3.6	15.0	N	4/5	底部から口縫へ縫やかに外反して立ち上がる。下位に縫をもつ	【図】ナデ【例】
第24 26	11	*	环	4.0	15.6	N	4/5	口縫部は外反する	【図】ナデ、薄く棒状研磨机【例】ナデ 幅範囲に二次焼成を受ける
	12	*	环	—	7.8	9世紀	底部破片 平底	【図】ナデ 口縫部による調整痕【例】系切り痕	
	13	*	器台	2.6	8.5	6世紀	脚部	脚部に折り返される。縫やかに立ち上がる	【内】ナデ
	14	*	筒瓶	8.5	14.7	6世紀	1/2	中部に最大径をもつ。全体的に丸みを帯びる	【図】ナデ【例】ロクロ成形による調整痕 内・外一部に施す
	15	* 頸部器皿	4.0	5.0	6~7世紀	完形	底部から縫やかに立ち上がる。口縫部は外反する	【図】ロクロ成形による調整痕 旋削直机、ナデ	
	16	* 頸部器皿	4.0	10.8	6~7世紀	完形	底部から縫やかに立ち上がる。口縫部は外反する	【図】ロクロ成形による調整痕 旋削直机、直机	
	17	* 頸部器皿	4.5	16.0	6~7世紀	完形	底部から縫やかに立ち上がる。口縫部は外反する	【図】ロクロ成形による調整痕 旋削直机、直机	
	18	* 真剣臺	1.50	19.0	II	口縫部 2/5	口縫部は縫やかに外反する。脚部にかけ縫やかに立ち上がる	【内】ナデ、ヘラケズリ 【外】ナデ、ヘラケズリ、輪筋み直内心	
	19	*	亞	6.8	12.0	III	1/5	口縫部は外反する。下位に縫をもつ。脚部にかけ縫み直す	【図】ナデ【例】ナデ。下から上にヘラケズリ
	1	*	瓶	18.5	33.5	II	3/5	上部に最大径を持つ。下位にかけ縫やかに直す	【図】ナデ【例】ナデ、ヘラケズリ、輪筋み直すや飛る 一部被熱により黒色化
第25 26	2	* 長胴甌	26.0	20.6	III	ほぼ完形	口縫部は外反する	【図】ナデ【例】口縫部ナデ 一部に二次焼成を受ける	
	3	* 長胴甌	10.5	19.0	N	破片	口縫部は外反する	【図】口縫部ナデ【例】口縫部ナデ、ヘラケズリ	
	4	* 長胴甌	30.5	22.0	V	口縫部 2/3	口縫部を手削し、口縫部にかけ「く」の字状を呈す。中央にかけ縫直す	【内】ナデ、ヘラケズリ 【外】ナデ、ヘラケズリ、輪筋み直せる	
	5	* 長胴甌	32.5	21.5	N	4/5	口縫部に「く」の字に外反する。下位にかけ縫下す	【図】ナデ【例】ナデ、薄くヘラケズリ	
	6	*	土玉	2.3	23	6~7世紀	完形	褐色を呈す。橢成長好。中央に貫穴。貫穴端部には完全に穿った痕跡が見られる	外側には荒い調整が施される
	7	*	土玉	2.1	24	6~7世紀	完形	明褐色を呈す。橢成長好。中央に貫穴。形状はやや不規則	外側の一部に被熱を受けた痕跡あり
	8	*	土玉	2.0	23	6~7世紀	1/2	明褐色を呈す。橢成長好。中央付近に貫穴の痕跡	外側にケズリの痕跡あり
	9	*	土製品	1.7	4.3	6~7世紀	完形	明褐色を呈す。中央部にぐれが見られる	—
	1	27H	环	6.0	12.0	III	底部1/2欠	丸窓。中央に縫をもつ。やや外反する。石英含む	【内】ヘラケズリ、黑色處理 【外】底部ヘラケズリ、口縫部ナデ
	2	*	环	2.9	13.3	N	完形	中部にかけ縫をもつ。墨丹と青白石含む	【内】底部ヘラケズリ、墨ナデ、口縫部ナデ
	3	*	环	3.5	13.3	N	口縫部欠	底部から縫やかに立ち上がる。筋部子含む	【内】底部に「く」字形の押さえ机。口縫部ナデ 内面に二次焼成を受ける(スズ)
	4	*	环	3.2	14.9	N	口縫部欠	底部から縫やかに立ち上がる。筋部子と青白石含む	【内】底部ヘラケズリ、口縫部ナデ 【外】底部ヘラケズリ、口縫部ナデ
	5	*	环	4.0	12.8	V	完形	底部から縫やかに立ち上がる。口縫部内済、白色粒子含む	【内】ナデ、堆積研磨机 【外】ナデ、ヘラケズリと接縫部
	6	*	高杯	0.50	13.5	III	脚部のみ	中間に縫をもつ。口縫部は外反する。黒石(やや多)と石英含む	【内】堆積研磨机、口縫部ナデ 【外】ナデ、ヘラケズリ、口縫部ナデ
	7	*	环	3.2	14.3	9世紀	1/2	底部から縫やかに立ち上がる。筋部子と青白石含む	【内】底部ヘラケズリ、口縫部ナデ
	8	*	土玉	1.9	21	—	完形	褐色を呈す。橢成長好。中央に貫穴。貫穴の筋は両面で直る	外側にケズリの痕跡あり
	9	*	土玉	2.1	21	—	完形	明褐色を呈す。橢成長好。中央付近に貫穴	—
	10	16H	环	5.0	14.1	7世紀	9/10	丸窓。底部やかに立ち上がる。ケイセイ含む	【内】口縫部ナデ【例】口縫部ナデ、ヘラケズリ
	11	*	环	5.1	13.8	III	1/2	丸窓。中央にかけ縫をもつ。口縫部は概ね外反する。ケイセイ含む	【内】口縫部ナデ、底部ヘラケズリ 【外】ナデ
	12	* 小形甌	7.4	6.0	II	2/3	平底。器底大きく張り出す。口縫部縫やかに外反する	【内】口縫部ナデ 【外】脚部及び底部にヘラケズリ。口縫部ナデ	
	13	*	瓶	6.0	4.5	III	底部のみ	底部を平らに成形する	【内】脚部研磨ナデ ヘラケズリ
	14	* 小形甌	16.2	12.6	III	2/3	平底。脚部縫やかに立ち上がる。口縫部屈くわざかに外反する	【内】口縫部ナデ【例】口縫部ナデ、ヘラケズリ。脚下部タキ、底ヘラケズリ	

遺物觀察表③

國籍番号	住居番号	器種	高さ (高さ高さ)	口径 (直径)	年代	残存率	成形の特徴等	調整の特徴等	備考
第25回	15	16H	小形台付壺	9.0	—	—	底・脚部の一部が 底部から側部まで大きく破やかに膨らみ立ち上る	【例】側面部方向へラッカズリ	
	16	—	坪	4.2	13.2	9世紀	底及び側部1/4 底面と側面が 平底。側面直線的に立ち上がる	【例】横ナデ、クロコ成形 【例】側面部・底面へラッカズリ	内部に二次焼成を受ける
	17	+	坪	3.8	13.2	9世紀	1/3 平底。中央に長い縫をもつ。側面直線的に立ち上がる	【例】横ナデ、クロコ成形 【例】側面部・底面へラッカズリ	
	18	+	坪	—	—	9世紀	底部 —	底面回転を示す	
	19	+	坪	6.7	6.0	9世紀	底部3/4 平底。底部に回転し切り唇(反唇折振り)をもつ	【例】側面部研磨、ナダ。朱あり 【例】口縁ナデ、底面へラッカズリ	外面部に広く二次焼成を受ける
	20	+	須恵器	6.8	—	7~8世紀	側面の一部(瓶片) ロクロ成形	【例】側面部研磨、ナダ。朱あり 【例】ロクロ成形が明確に残る	
	21	+	土玉	1.2	1.0	—	完形 青褐色を呈す。貫穴をもつ	外表面を滑らかに調整	
	22	+	筋跡串	0.7	7.0	—	完形 明快な足を呈す。断面および底部を平らに調節する	表面にロクロによる丸要素(丸取り)	須恵器の転用か
	1	17H	坪	4.8	12.2	IV	完形 丸底。下段の様から若干反して立ち上がる	【例】ナデ、【例】口縁ナデ、底部へラッカズリ	
	2	+	坪	4	11	IV	え底。上部に明確な縫をもつ。底部から腰やかに立ち上がり腰から内凹する	【例】口縁ナデ 【例】側面部ナデ。一定方向にケズリ	
	3	+	坪	4.5	12.6	IV	中部に長い縫をもつ。底部から腰やかに内凹して立ち上がる	【例】口縁ナデ。棒状研磨 【例】口縁ナデ、ヘラナデ	
	4	+	坪	4.5	10.6	IV	中部に長い縫をもつ。底部から腰やかに立ち上がる 【例】ロクロは若干外反する	【例】口縁ナデ。棒状研磨 【例】口縁ナデ。底面へラッカズリ	
	5	+	坪	3.5	6	IV	完形 丸底。底部から腰やかに立ち上がり中部の様から若干外反する	【例】口縁ナデ。棒状研磨 【例】口縁ナデ、ヘラケズリ	
	6	+	坪	3.4	12.4	IV	口縁部分一部欠け 丸底。中部にわずかな縫をもつ。底部から腰やかに内凹する	【例】ナデ 【例】口縁ナデ。一定方向にヘラケズリ	
	7	+	坪	4.1	13	9世紀	完形 平底。上部にわずかな縫をもつ。底部から腰やかに内凹して立ち上がる	【例】口縁ナデ 【例】口縁ナデ、ヘラナデ	
	8	+	須恵器	8.0	—	9世紀	底部破片 ロクロの成形	【例】ナデ【例】表面によるケズリ、赤取り粗	
	9	+	須恵器	5.0	13.0	5~6世紀	平底。底部から腰やかに立ち上がる。中部の明確な縫から内凹する 口縁部は若干外反する	【例】丁寧なナナメ【例】脚部回転ケズリ、底部 赤取り粗、口縁部丁寧なナナメ	
	10	+	施釉皿	2.7	13.6	中葉 以降	1/4 ロクロ成形。上部はどれ程が濃い	【例】施釉あり	釉は淡緑色。裏地は淡褐色を呈す
	11	+	高台付坪	4	7	6世紀	高台のみ 脚部から脚部にかけて「く」の字状に外反する。脚部は若干ハサウエーの状態を呈す	【例】丁寧なナナメ【例】脚部回転ケズリ、底部 赤取り粗、口縁部丁寧なナナメ	削り処理を施す
	12	+	高台付坪	6.3	15.5	9世紀	2/3 脚部から腰やかに立ち上がる。表面は僅く内凹する	【例】丁寧なナナメ 【例】丁寧なナナメ、ヘラケズリ、高台内に調整	
	13	+	須恵器 高台付坪	6.0	14.4	9世紀	3/4 脚部には垂直に立つ。表面は僅く内凹、口縁部はまく外反する	【例】丁寧なナナメ 【例】丁寧なナナメ、底部布切有機、高台内調整	
	14	+	高坪	10	9.4	III	脚部のみ 楕円良好。ロクロ成形	【例】脚部ナデ 【例】脚部ナデ、ロクロ成形による調整感あり	
	15	+	須恵器高坪	10.5	10.3	5~6世紀	1/3 上部から腰やかに内凹する。下部は強く内凹する	【例】丁寧な成形のヨコ両面	
	16	+	小形要	9.6	12.4	IV	1/4 口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部や内凹する	【例】口縁部ナデ【例】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	17	+	曲	19	20	IV	1/3 脚部に最大径をもつ。口縁部は外反する	【例】口縁部ナデ【例】口縁部ナデ、ヘラケズリ	一部削りを施す
	18	+	小形要	13.5	14.4	IV	1/2 口縁部 口縁部は外反する	【例】口縁部ナデ【例】口縁部ナデ、ヘラナデ	
	19	+	長脚要	16.0	35.8	IV	破片 口縁部は外反する。口縁から脚部やや直線的	【例】口縁部ナデ【例】口縁部ナデ、脚部ヘラケズリ	
	1	+	甕	14.5	21.0	III	脚部のみ 脚部は外反し腰やかに下向する	【例】口縁部ナデ、ヘラケズリ 【例】脚部ナデ、ヘラケズリ	
	2	+	長脚要	17.6	17	IV	1/3 口縁部は外反し腰やかに下向する	【例】口縁部ナデ、ヘラケズリ 【例】脚部ナデ、ヘラケズリ	
	3	+	長脚要	20	18.6	II	1/4 口縁部は外反し腰やかに下向する	【例】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	4	+	石製白玉	0.3	0.8	—	宛端要 表面は白玉	【例】脚部ナデ	
	5	+	土玉	2.2	2.5	—	完形 表面は白玉	【例】脚部ナデ、中央部に貫穴をもつ	
	6	+	土玉	1.8	2.1	—	完形 表面は白玉	【例】脚部ナデ、中央部に貫穴をもつ 表面を滑らかに調整する	
	7	+	土器	4.1	1.1	—	完形 表面は白玉	【例】脚部ナデ、中央部に穴をもつ 表面の裏面は荒い	未製品か
	8	+	土器	4.2	1.6	—	完形 表面は白玉	—	
	9	+	土器	7.6	2.0	—	完形 表面は白玉	—	先端部に朱が塗される。
	10	+	天端部	—	—	魂文時代	完形 黒色を呈す。チャート質	長173mm・幅3.25cm・厚1.35cm・重量42.3g	
	11	—	石板	—	—	魂文時代	完形 黒耀石	長16cm・幅1.18cm・厚0.4cm・重量0.7g	調査エリア
	12	18H	深鉢	—	—	魂文中期	口縁部下部より内縁部接合部に縫をもつ。全 身墨丹を含む	【例】口縁部ナデ 【例】口縁部に墨丹を施す	
	13	+	土製品	—	—	—	破片 褐色を呈す。底成良好	—	
	14	22H	高坪	6.80	—	IV	底部 底部は外反する。底部に縫を持ち、深い窪部へ立ち上がる。	【例】脚部ヘラ削り。底部ナナメ	
	15	+	長脚要	(18.8)	17.2	II	底部欠損 ややくみを呈す。底成良好。中央部に貫穴をもつ。	【例】口縁部ナデ【例】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	16	+	石甕	—	—	魂文中期	一部欠損 チャート	長170cm・幅37.5cm・厚0.96cm・重量6.56g	
第26回	1	20H	坪	3.8	13.4	III	2/3 中部に縫をもつ。口縁は若干外反する。側面斜立ち 下段に縫をもつ。口縁は腰やかに外反する。白色粘土を含む	【例】側面部研磨【例】ヘラケズリ	内部剥落が見られる
	2	+	坪	3.8	12.0	IV	2/3 白色粘土を含む	【例】側面部研磨	外面部に黑色整理(焼成)を施す
	3	+	坪	3.6	14.0	IV	口縁部欠 下段に縫をもつ。口縁は外反する。側面斜立ち 白色粘土を含む	【例】ナナメ【例】側面部研磨	
	4	+	坪	2.6	14.0	IV	1/2 中部に縫をもつ。腰や内凹する。側面斜立ち 白色粘土を含む	【例】側面部研磨 【例】一定方向にケズリ。ヘラナデ	
	5	+	坪	3.7	12.0	IV	口縁部欠 下段に縫をもつ。口縁部は外反する。白色粘土を含む	【例】一定方向にケズリ。ヘラナデ	内・外表面に黑色整理を施す
	6	+	坪	3.0	10.0	V	2/3 口縁部は垂直に立ち上がる。白色粘土を含む	【例】側面部研磨 【例】口縁部を帯に研磨。底面ヘラケズリ	

遺物觀察表④

	図版番号	佳居番号	器種	高さ （有高） （無存）	口径 （有存） （無存）	年代	残存率	成形の特徴等	調整の特徴等	備考	
第29回	7	30H	高杯	4.8	120	Ⅱ	—	脚部 1/3欠損	低い脚部は下位に脚部が並ぶ。口縁部は直線的に外反する。脚部粒合む	【内・外】口縁から底部までナデ	
	8	*	鉢	9.3	132	—	—	口縁部欠	上部に高い壇をもつ。口縁部は内凹する。脚部粒合む	【内・外】口縁部ナデ。脚部にヘラケズリ	
	9	*	長胴甕	31.5	20.2	N	—	—	平底、中部に膨らみをもつ。脚部から底部にかけてやがちですぼまる。脚部粒合む	【内・外】口縁部ナデ。ヘラケズリ	内・外面に一部二次焼成を受けた
	10	*	長胴甕	38.5	21.9	V	—	口縁部欠	底部から口縁にかけ壇やくに膨らみをもつ。脚部石合む	【内・外】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ。脚部ヘラケズリ。口縁部に残をもつ	内面一部剥落する
	11	*	長胴甕	39.3	21.0	V	4/5	—	底部から口縁やくに立ち上がる。口縁部は「く」字形に外反	【内・外】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ。ヘラケズリ	
	12	*	小形甕	17.0	14.0	III	—	口縁部欠	中底部に最大径をもつ。壇やくに底部に並ぶ。白色粒子を含む	【内・外】口縁部にナデ【外】口縁部に棒状工具による平底ナデ。経部にナデ	
	13	*	高台付杯	7.0	140	9世紀	1/3	—	脚部「丁」字形。底部は壇やくに立ち上がる	【内】丁寧なナデ。高台内部にも調査あり	
	14	*	高台付杯	5.5	13.5	9世紀	2/3	—	脚部「ハ」字形。底部は壇やくに立ち上がる	【内】丁寧なナデ。高台内部にも調査あり	
	15	*	須恵器甕	3.6	12.0	—	—	底部から壇やくに立ち上がる。脚部粒合む	【内・外】一部に釉薬あり	化粧との混合層、付着で剥落	
	16	*	土罐	—	—	—	—	—	—	—	
	17	*	片口	—	—	—	—	破片	チャート	長298cm・幅216cm・厚0.57cm・重量2.22kg	
	1	21H	杯	4.7	137	III	—	丸底、上部に壇をもつ。底部から壇やくに立ち上がる。内側に白い柱から壇は内凹する	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ		
	2	*	玉白	0.15	0.7	—	—	完形	中央部に貫穴	断面を平らに調整する	
	3	*	羽口	6.7	—	—	—	破片	底部に小壇合む	—	
	4	*	広口甕	32.0	23.9	III	1/2	—	脚部に最大径をもつ。小さい壇の底部より大きいく壇やくに立ち上がる	【内】口縁部ナデ	
	5	*	広口甕	37.5	30.9	N	—	口縁部 一部欠	平底、脚部に最大径をもつ。底部より大きいく壇やくに立ち上がる。口縁部は外反する	【内】口縁部ナデ、ヘラケズリ 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	6	*	広口甕	28.7	15.8	N	2/3	脚部中央付近に最大径をもつ。口縁部は内反する	【内】口縁部ナデ、ヘラケズリ 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	脚部に二次焼成を受ける	
	7	*	小形甕	21.0	14.0	N	5/6	—	平底、底部から壇やくに直立する。口縁部は外反する	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ。脚部み俄が残る。腹部にナデ	全体的に二次焼成を受ける
	8	*	長胴甕	22.5	23.0	III	3/5	—	口縁部は壇やくに外反する	【内】口縁部ナデ、脚部ヘラケズリ【外】口縁部ナデ。若干脚部み俄が残る。脚部ヘラケズリ。	二次焼成を受ける
第30回	1	*	長胴甕	32.0	19.4	N	5/6	—	平底、小さな壇の底部より壇やくに立ち上がる。口縁部は外反する	【内】脚部に堆向のヘラケズリ 【外】口縁部ナデ、腹部ヘラケズリ	二次焼成を受ける
	2	*	長胴甕	34.6	18.0	N	5/6	—	平底、伴の小さい壇底より壇やくに立ち上がる。口縁部は外反する	【内】脚部ナデ、脚部ヘラケズリ 【外】口縁部ナデ、腹部ヘラケズリ	二次焼成を受ける
	3	*	長胴甕	12.2	17.0	N	—	口縁部1/4	口縁部は外反し、脚部は壇やくに立ち上がる	【内】口縁部ナデ、脚部み俄が残る。脚部に当共残る	
	4	*	長胴甕	12.5	16.1	N	—	口縁部1/4	口縁部は外反し、脚部は壇やくに立ち上がる	【内】口縁部ナデ【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	二次焼成を受ける
	5	29H	小形甕	3	5.2	—	—	—	平底、底部から脚部は大きいくらんで立ち上がる	【内・外】ヘラケズリ、ミガキ	
	6	30H	瓦	6.5	—	—	—	破片	内側に布目が見られる	【内】布目【外】ヘラケズリ	
	7	*	丸瓦	12	7.0	—	—	表面一部 剥離	明褐色を呈す	【内・外】ヘラケズリ	
	8	*	31H	甕	8.8	6.6	—	—	平底、脚部は壇やくに立ち上がる	【内・外】ヘラケズリ	
第31回	2	*	須恵器破片	4.2	—	—	—	破片	底成良好	【内】ナデ【外】流状	
	3	*	須恵器破片	7.8	—	—	—	破片	底成良好	【内】ナデ	
	4	*	土罐	5.4	13	—	—	—	明褐色を呈す。底成良好。中央部に貫穴をもつ	—	
	5	32H	杯	4.0	12.4	N	—	完形	中底部に壇をもつ。やや外反して立ち上がる。脚部粒合む	【内】口縁部ナデ、底部ヘラケズリ	
	6	*	杯	3.5	12.6	N	2/3	—	下位に壇をもつ。底部から外反して立ち上がる。脚部粒合む	【内】口縁部ナデ。底部ヘラケズリ	黒色処理を施す
	7	*	小形甕	16.0	14.0	N	1/2	—	平底、底部から脚部は大きいくらんで立ち上がる。内側に成り立つものに設え持つ。全身を含む	【内】口縁部ナデ、脚部と底部にヘラケズリ。	
	8	*	長胴甕	17.1	21.6	N	—	口縁部 一部の 内部	脚部は直立から外反する。脚部石合す。チャートを含む	【内】口縁部ナデ。わざかに脚部み俄が残る。脚部ヘラケズリ	
	9	*	長胴甕	12.7	25.2	N	—	口縁部1/3	脚部からならだらかに外反して口縁に並ぶ	【内】口縁部ナデ 【外】口縁部ナデ、ヘラケズリ	
	10	*	高杯脚部	4.9	—	—	—	破片	底成良好	—	高杯等脚部破片か
	11	*	瓶瓶脚部	4.3	—	—	—	破片	底成良好	—	
	12	*	深鉢	—	—	阿玉 台式	—	口縁部片	口縁部は外反し壇をもつ。金雲母を含む	【内】棒状工具による縦・横への施文	
	13	埋付 内側	須恵器破片	—	—	—	—	破片	底成良好	【内・外】タテキ	
	14	*	須恵器破片	—	—	—	—	破片	底成良好	【内・外】タテキ	
	15	*	須恵器破片	—	—	—	—	破片	底成良好	【内・外】タテキ	
	16	*	須恵器破片	—	—	—	—	破片	底成良好	【内】タテキ	
	17	*	須恵器破片	—	—	—	—	破片	底成良好	【内】タテキ	
	18	*	須恵器破片	—	—	—	—	破片	底成良好	【内・外】タテキ	
	19	*	玉白	13.0	—	—	—	完形	中央部に貫穴	—	
	20	*	埴輪	81.4	93.0	5~6世紀	—	破片	壇底良好	【内】ナデ	
	21	*	瓦	94.8	109.6	5~6世紀	—	破片	内側に布目が見られる	【内・外】タテキ	

# 写 真 図 版





1 重機による掘削



2 調査区全景（南より）



3 調査区完掘後全景（北より）

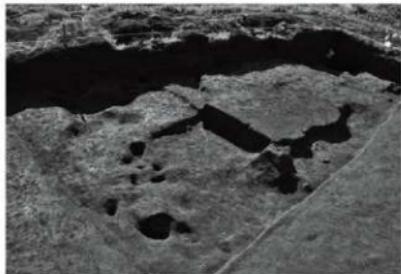


4 1号住居全景（東より）



5 1号住居内遺物出土状況（東より）

【写真図版 2】



1 2号住居全景（北より）



2 2号住居内焼土断面（東より）



3 3号住居全景（西より）



4 5号住居全景（西より）



5 6・24・26号住居全景（南より）



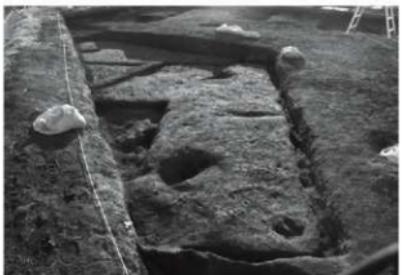
6 6・24・26号住居内焼土塊（南より）



7 6・24・26号住居内ベルト断面（南より）



8 24号住居内カマド（北より）



1 6・24・26号住居完掘後全景（北より）



2 6・24・26号住居完掘後全景（南より）



3 24号住居完掘後全景（西より）



4 8号住居完掘後全景（南より）



5 8号住居完掘後全景（北より）



6 8号住居内カマド（北より）



7 8号住居内カマド（南より）

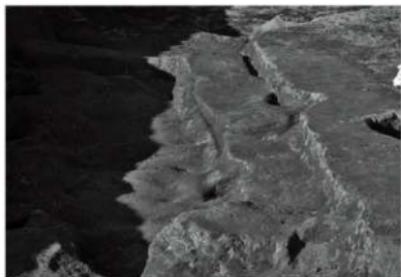


8 8号住居内カマド（西より）

【写真図版 4】



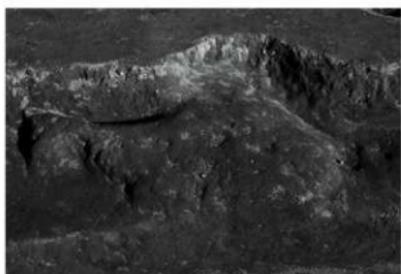
1 8号住居内カマド（東より）



2 9号住居全景（西より）



3 9号住居内粘土塊（西より）



4 9号住居内焼土塊（西より）



5 9号住居内遺物出土状況（西より）



6 10号住居A・B全景（南より）



7 10号住居A全景（北より）



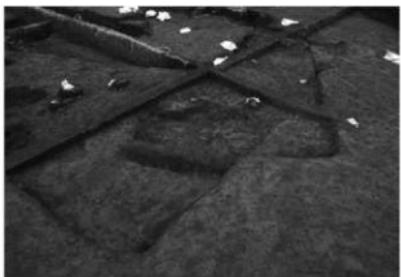
8 10号住居A全景（東より）



1 10号住居B全景（西より）



2 10号住居B全景（南より）



3 11（一部）・12号（全景）住居全景（西より）



4 11（一部）・12号（全景）住居全景（東より）



5 11号住居（一部）全景（南より）



6 14号住居A全景（北より）



7 14号住居A内ベルト断面（東より）



8 14号住居A内遺物出土状況（西より）

【写真図版6】



1 14号住居B全景（南より）



2 14号住居B内焼土（南より）



3 14号住居B内焼土（西より）



4 14号住居B完掘後全景（南より）



5 14号住居B完掘後全景（北より）



6 15・27・28号住居全景（南より）



7 15・27・28号住居内サブトレレンチ断面①



8 15・27・28号住居内サブトレレンチ断面②



1 15・27・28号住居サブトレーンチ内  
遺物出土状況（南より）



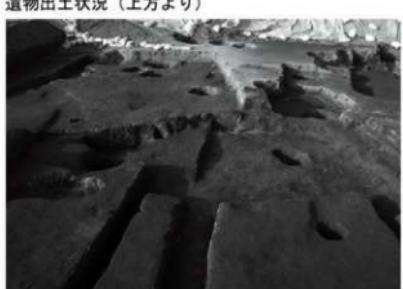
2 15・27・28号住居サブトレーンチ内  
遺物出土状況（北より）



3 15・27・28号住居サブトレーンチ内  
遺物出土状況（上方より）



4 15・27・28号住居内ベルト断面（東より）



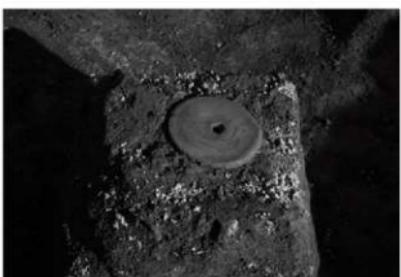
5 15・27・28号住居完掘後全景（南より）



6 16号住居A全景（西より）

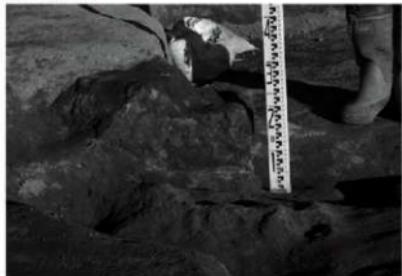


7 16号住居A全景（南より）



8 16号住居A遺物出土状況（紡錘車）

【写真図版8】



1 16号住居A内カマド断面（西より）



2 17号住居群I・H全景（南より）



3 17号住居群I・H全景（北より）



4 17号住居群A・B・C全景（北より）



5 17号住居群E・F全景（西より）



6 17号住居群G全景（北より）



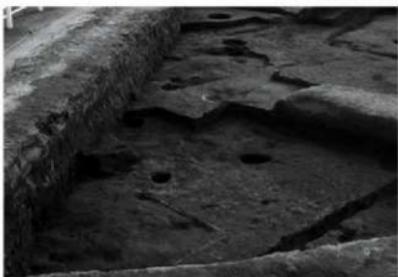
7 17号住居群A全景（南より）



8 17号住居群A内ベルト断面（北より）



1 18号住居全景（南より）



2 22号住居全景（北より）



3 22号住居全景（西より）



4 20号住居全景（南より）



5 20号住居内ベルト断面（東より）



6 20号住居内遺物出土状況（南より）



7 20号住居内遺物出土状況（西より）



8 20号住居内遺物出土状況（上方より）

【写真図版10】



1 19・20号住居完掘後全景（南より）



2 21号住居全景（西より）



3 21号住居全景（北より）



4 21号住居内遺物出土状況（南より）



5 21号住居内35土坑全景（西より）



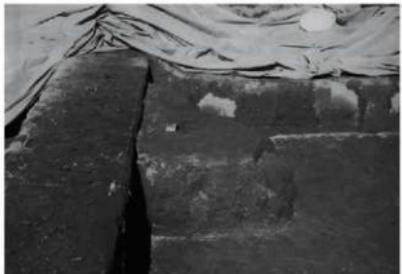
6 21号住居内35土坑断面（北より）



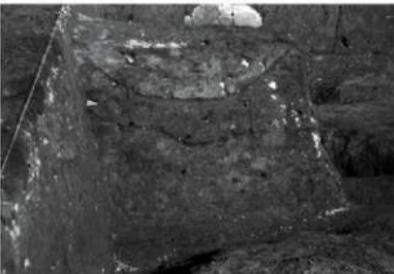
7 21号住居完掘後全景（北より）



8 29・30・32号住居作業風景（西より）



1 30号住居内粘土塊（南より）



2 30号住居内粘土塊断面（南より）



3 32号住居内カマド（東より）



4 32号住居内カマド（南より）



5 29・30・32号住居完掘全景（東より）



6 29・30・32号住居完掘全景（西より）



7 29・30・32号住居完掘全景（北より）



8 31号住居完掘全景（東より）

【写真図版12】

<1号住居>



<2号住居>



<5号住居>



<6号住居>



<24号住居>



<11号住居>

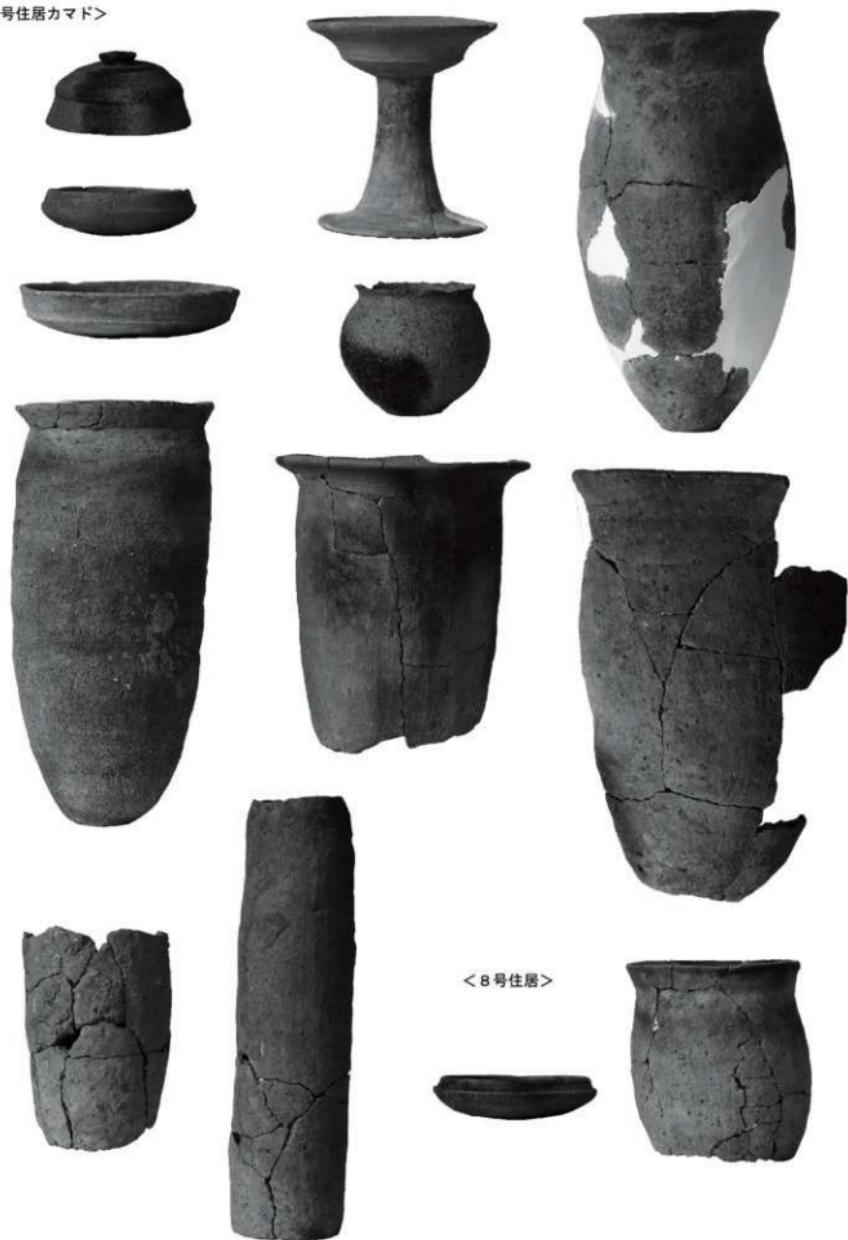


<12号住居>



(1/2)

<8号住居カマド>



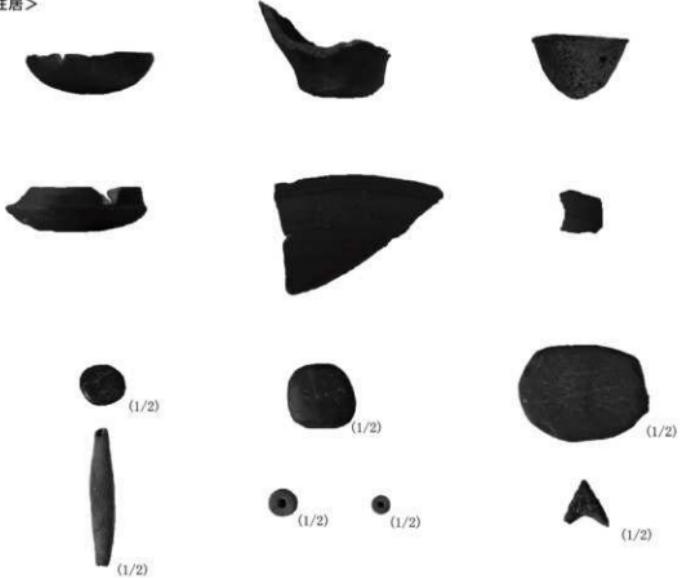
<8号住居>

【写真図版14】

(13号住居)



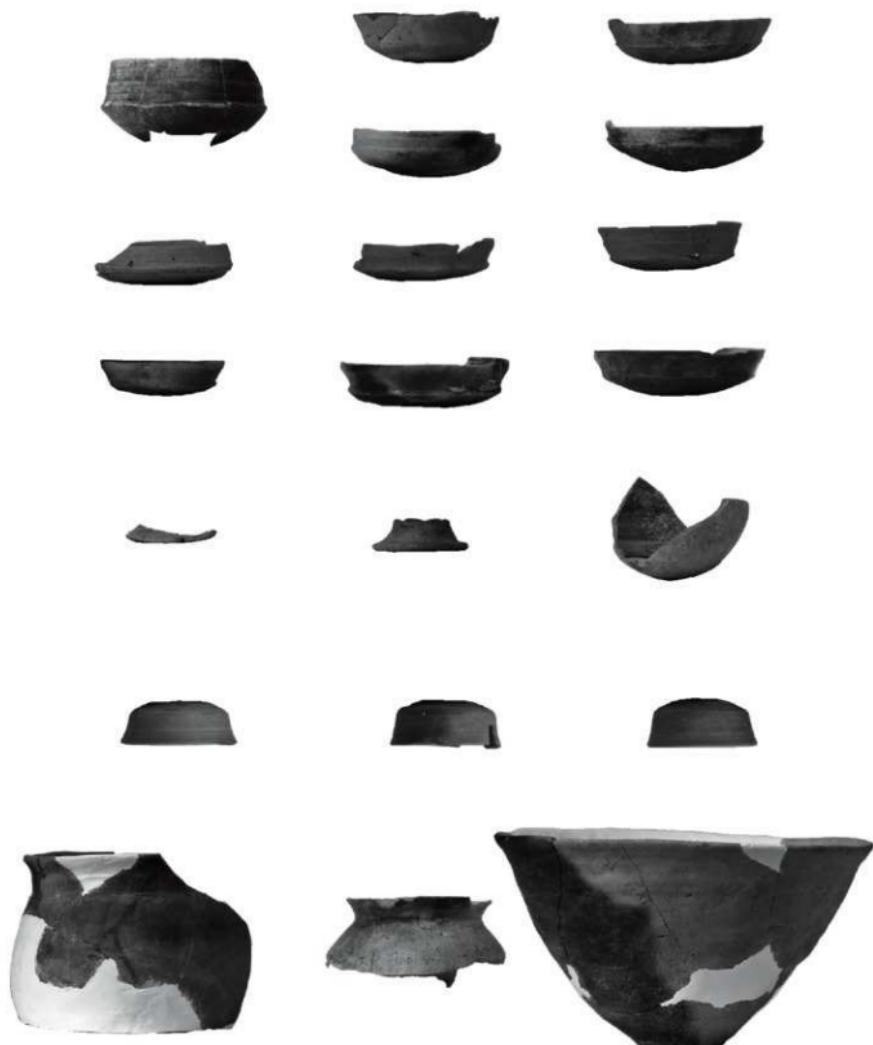
<14号住居>



<27号住居>

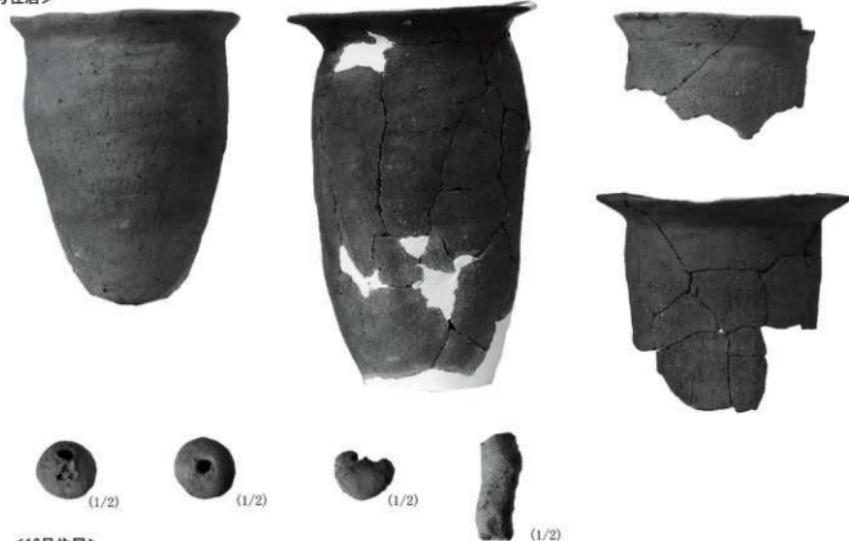


<15号住居>



【写真図版16】

<15号住居>



<16号住居>

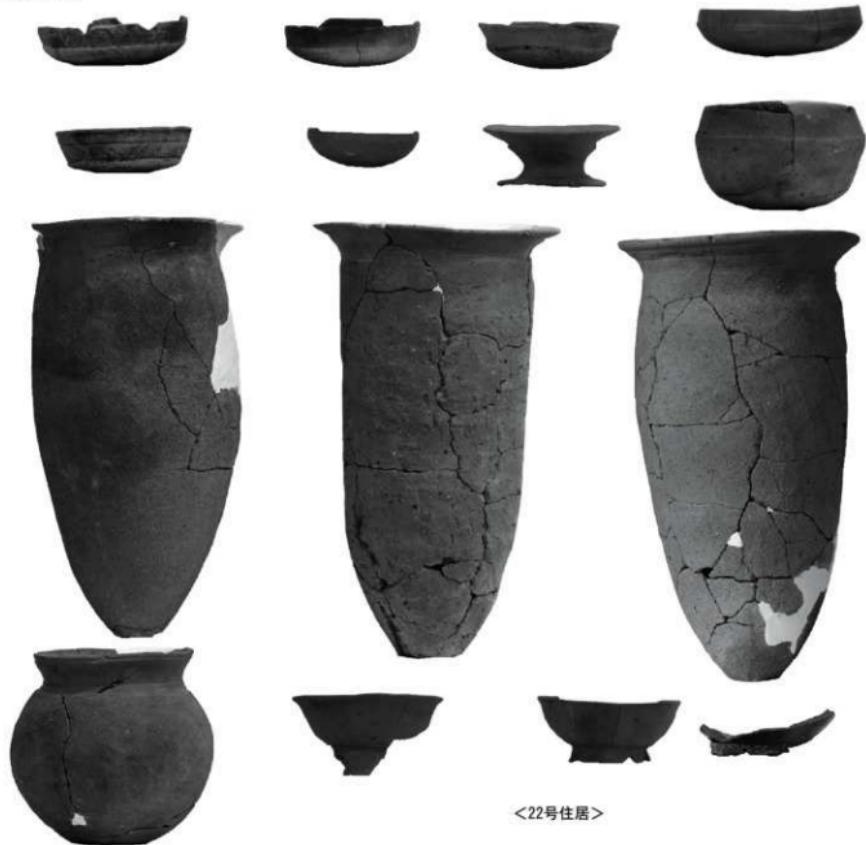


&lt;17号住居群&gt;



【写真図版18】

<20号住居>



<22号住居>



<18号住居>



<21号住居>



【写真図版20】

<29号住居>



<30号住居>



<31号住居>



<32号住居>



(1/2)

<調査区内表探>



(刀子:1/1)

(鉄屑:1/2)

(種子:1/1)

## 抄 錄

ふりがな	とうごういせき						
書名	当郷遺跡						
副書名	市道3363号線(東部環状線)道路改良工事に伴う発掘調査				卷次	_____	
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書				シリーズ番号	第51集	
編集者名	奈良 純一 宮田 主祐				編機	集間	館林市教育委員会
編集機関所在地	〒374-8501 群馬県館林市城町1番1号						
発行年月日	2015(平成27)年1月31日						
市町村コード	102075						
所収遺跡	所在地	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
当郷遺跡	楠町字陣谷	83	361441	1393414	2013.11.06 ~ 2014.01.31	約450m <sup>2</sup>	道路
遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
当郷遺跡	散布地	古墳、奈良、平安	住居跡35・土坑他		土師器(片)・須恵器(片)・石器・金属遺物・炭化材等		

---

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第51集

## 当郷遺跡

—市道3363号線(東部環状線)道路改良工事に伴う発掘調査—

---

編集・発行 館林市教育委員会 文化振興課 文化財係(館林市文化会館内)  
〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 電話0276-74-4111

印 刷 上野印刷工業株式会社  
発行年月日 平成27年1月31日

---